



第75号

財団法人 特攻隊戦没者 慰霊平和祈念協会

〒105-0014 東京都港区芝 2-5-19TAビル

電話 03 (5730) 1016 FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp 振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能 発行人 栗原宏 印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

第29回陸海軍特攻隊合同慰霊祭…1  
 靖国神社遊就館前の「特攻勇士之像」を仰ぎ見て…6  
 東京大空襲  
 一勝者の論理・敗者の卑屈…9  
 前号の「靖国神社年越し詣で」を  
 読んで一筆…11

**第29回陸海軍特攻隊合同慰霊祭**  
 平成20年3月29日(土) 12時～13時  
 於 靖国神社拜殿・本殿  
 式次第  
 国歌斉唱 (トランペット 田樽雅之)  
 修抜 献饌 (サクソフォン 鈴木隆春)  
 祝詞奏上  
 祭文奏上 会長 山本 卓真  
 献吟 一誠流 石橋 一歌他  
 奉納演奏  
 世田谷コールエーデ合唱団  
 指揮 本間 充

「遥かな友に」「千の風になって」  
 斉唱(全員)「故郷・海ゆかば」  
 (トランペット・サクソフォン吹奏)  
 昇殿参拝 参列者一同  
 (トランペット「国のしずめ」)  
 献吟  
 ◇ ◇ ◇  
 吟 石橋一歌  
 笛 逢坂竜信

一歩兵士が目撃した特攻機…12  
 海軍神雷部隊  
 人間爆弾「桜花」体験記…13  
 碑は語る特攻隊⑥…18  
 西行と桜 特攻隊員と桜…19  
 靖国百人一首…20  
 平成20年度 都城市特別攻撃隊  
 戦没者慰霊祭…25  
 (遺稿) 歩兵第五十九聯隊  
 パラオ作戦外史抄…26  
 (遺稿) 特攻隊員森本秀郎少年の  
 思い出…32  
 前号の「秋水の試験飛行成らず」  
 を読んで…37  
 平成20年度  
 第1回理事会・評議員会報告  
 (平成20年3月6日開催)…39  
 平成19年度事業報告…41  
 事務局からの報告等…43

事務所移転のお知らせ

当協会の事務所は、4月7日左記へ移転しました。

〒105-0014  
 東京都港区芝2-5-19  
 TAビル 4階  
 電話 03-5730-11016  
 FAX 03-5730-11017

## 祭文

光陰は矢の如く流れ、本日茲に第二十九回特別攻撃隊合同慰霊祭を迎えました。御遺族、戦友、関係者一同靖國神社頭に相集い、謹んで在天の特攻烈士の御霊に申し上げま

す。六十有余年前、戦局日々非勢の度を加える中、皆様方は、美しい国土と、その上に育まれてきた我が民族を、敵手の蹂躪から護り通せるならば、一身を擲つて己が命の消え失せることを辞せずと、嬌敵を屠るべく、空に、海に、陸に、敵艦船等に各地で敢然と突入散華されました。当時の情況下にあつて、国を護るとい

う一念が発露、凝集したものが正に特攻であつて、そこに日本人の精神文化の真髓が籠められたものであることを、私共は生ある限り語り続けて参ります。

益々混沌の度を深める世界情勢下で、これから我が国が民族としての誇りを失わず、毅然として国家の尊厳を保つて生き抜いて行く為には、この心をこそ絶対に見失ってはならぬものであることが、永久に語り継

がれて行かなければなりません。

然しながら、今や会員の大部分を占める旧軍関係者の殆どが傘寿を越えて、会員数の減少が加速されて来ている厳しい現実の下、未だその途の遠きを痛感致しております。

この様な時に、大阪芸術大学の学生、職員有志が結成した「日本人の心を伝える会」が制作したCD「あ、特攻」「特攻勇士之像」を献納する運動が始まったことは、昨年御報告申し上げました。

昨年は福井県、鹿児島県、宮城県、三護國神社と世田谷観音寺に奉納されて、これらの像はそれぞれの場所です詣者に「特攻とは」を問い掛けておいでになります。当初製造した五体の内残る一体は、来月四日に愛知県護國神社に奉納除幕される運びになっております。私共は、これから一体でも多く「特攻勇士之像」が各地の護國神社に奉納出来る様に努力を続けて行く所存であります。

翻つて最近の世相を眺めますと、あらゆる立場で公に対する責任感・倫理観が欠如し、また、人倫に悖る行為が多発化して、国としての根幹に亀裂が

入り始めたのではないかと危惧せしめられるものがあり、誠に憂慮に堪えない次第であります。奉納された「特攻勇士之像」が、必ずやこの様な風潮の歯止めの一助となることを信ずるものであります。

戦後レジームからの脱却を唱えて就任した安倍首相は、教育基本法の改正や防衛庁の省への昇格等を実現して更なる手腕の發揮を大いに期待しておりましたが、突然の辞任でその流れが止まったことは遺憾の極みであります。健康問題が主因とのことであり、東京裁判史観からの脱却と憲法改正に、再びその手腕を發揮される日が、一日も早く訪れることを願つて止みません。

在天の諸霊、どうか私共を御照覧下さり、宜しくお導き下さい。そして、尚一層の御加護を賜ります様に、心からお願ひ申し上げて、祭文奏上を終わります。

平成二十年三月二十九日

財団法人

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

会長 山本 卓眞

勤皇隊 片野 茂

昭和十九年十二月七日 オルモック湾

で戦死

大君のしこのみ盾とかねてより

きたへきたへし大和魂

山桜隊 滝沢光雄

昭和十九年十月二十五日 レイテ湾で

戦死

蓄にて散るも又よし桜木の

根の絶ゆことのなきを思へば

◇ ◇ ◇

3月29日(土) 正午より靖國神社において、当協会恒例の第29回陸海軍特攻隊合同慰霊祭が厳肅に斎行され、御遺族44名を始め来賓、戦友、一般会員等合わせて290余名が参集して、英霊奉慰の誠を捧げた。

今年、明治維新(明治元年・1868年)から140年、安政の大獄(安政5年・1858年)から150年の節目の年に当たる。嘉永6年(1853年)の黒船来航以来、幕藩体制の下での天下泰平の夢破れ、疾風怒濤の幕末動乱期を迎える、この10

年程の間に、先人達は、懸命に国のあるべき姿を求めて国事に奔走した。靖國神社には、吉田松陰、坂本龍馬を始め幕末維新時の殉難者4千余柱が合祀されているが、この節目の年に当たり、改めて先人達の御遺徳に学ぶため、遊



就館において特別展「幕末維新展」が開催されている（3月20日～12月8日）。

この日、靖國の宮居の桜は、22日の開花宣言からほぼ一週間、この慰霊祭に合わせたかのように、満開の壮観を醸して英霊の御霊をお迎えした。丁度夜来の雨も上がり、燦々と降り注ぐ春の日差しも一層清らかに、神殿は清明の気に包まれていた。大空を吹き渡る風も、流れる白雲も、英霊達の爽やかな御声とも、御影とも拝する清々しさである。

桜は清明美の極致とも言われる。その花の梢で会い歌わんと誓い、勇躍身を擲って護国の神となられた英霊達の御歌声が聞こえるような気さえする。

今年も、女性合唱団・世田谷コールエーデの皆さんによる『千の風になって』の合唱曲が献奏されたが、誠に美しい曲である。昨年もこの欄で紹介したが、この歌は死者が書いた詩、死者から生者へのメッセージとも言われる。「私のお墓の前で泣かないでください／そこに私はいません」「千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています」と。死者はまた光に、雪に、鳥に、星になって、いつも生者と共にある、だから嘆かないでほしい、と。愛する人、大切な人を亡くした時、

その人は風や光になって空を駆け、地に降り注いでいる、生命は万物に宿る、万物は流転する。これは死と再生の詩である。「死は愛する者が遠くへ行ってしまうことではなく、姿を変えて近くにいること。つまり、死によって絆は分断されるのではなく、復活するのである」と、この詩は言っているのではないか。殊更に宗教を持ち出さずとも、風や光といった素朴な自然観の中で、死者の魂と触れ合えるということである。

水が流れるように、風が吹き渡るように、あるがままに自然に生きる。無為自然、無私無欲、そして、自分以外



修 抜



山本会長祭文奏上



献吟 石橋一歌・笛 逢坂電信

の生命のために何ができるかを考える、生命の哲学とも言うべきものであろう。これは正に、無私無欲、自らの生命を擲って、国を護り、愛する人達



献歌・世田谷コールエーデ合唱団

を庇護し、悠久の大義に生きた特攻勇士の靈魂に通じるものがあると言えよう。慰霊祭は、トランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修抜・献饌・祝詞奏上の神儀に続き、山本会長が祭文（別掲）を奏上、「特攻精神とは、国を護るといふ一念が凝集、発露したものであって、我が国が民族としての誇りを失わず、毅然として国家の尊厳を保って生き抜いて行くためには、この心をこそ絶対に失ってはならないものであり、永久に語り継がれていかなければならない」と述べ、「特攻勇士之像」の全国護国神社への献納を始めとして、英霊顕彰の更なる推進と永代

継承を誓った。

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸を打つ。世田谷コールエーデ合唱団による献歌（「遙かな友に」と「千の風になつて」（歌詞・音譜は5頁に掲載）また、切々として胸に迫る。最後は、寥々と響くトランペットの伴奏に合わせて、一同「故郷」と「海ゆかば」を唱和する。

次いで、参列者全員昇殿して参拝し、トランペットの演奏「国のしずめ」に合わせて黙祷を捧げた。滞りなく慰霊祭を終えて、参集殿を退出すれば、そこは桜花爛漫の神園、参拝者の波に溢れており、遊就館前の「特攻勇士之像」



トランペット「国のしずめ」田櫛雅之

にも献花されて、大勢の人々が碑前に佇み、祈りを捧げる姿が見られた。

### 平成19年度年次総会及び懇親会

平成20年3月29日（土）13時30分～

於アルカディア市ヶ谷（私学会館）

#### 総会 13時30分～14時

開会の辞 事務局長 栗原 宏

会長挨拶 会長 山本 卓眞

会務報告 理事長 菅原 道熙

#### 懇親会 14時～16時

来賓紹介 理事長 菅原 道熙

懇談会食 閉会の辞 事務局長 栗原 宏

慰霊祭終了後、アルカディア市ヶ谷（私学会館）に移動し、同会館3階「富士の間」において、総会及び懇親会が開催された。

総会では、まず山本会長が挨拶に立ち、益々混迷の度を深める世界情勢と国内政治の閉塞感、公に対する責任感・倫理観の欠如、人倫に悖る行為の多発等誠に憂慮に堪えない状況の中で、昨年、安倍内閣の下で教育基本法が改正され、幅広い知識や教養と共に、公共心や規範意識を育てることが重視され、戦後教育の弊害が見直されようとしている。この程小中学校の新しい学



山本会長挨拶

習指導要領が告示されたが、その中の道徳教育では、愛国心を育むことや、国歌を歌えるよう指導することなどが明記され、教育再生への第一歩が踏み出されたことは喜ばしい、と述べた。

続いて、菅原理事長から平成19年度の事業報告と平成19年度の収支計算書についての説明と報告があり、いずれも承認された。また、平成20年度においては、前年度に引き続き、「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業を更に推進させたい、と述べた。

続いて、懇親会に移り、菅原理事長から来賓の紹介がなされたが、特筆すべきは、韓国ソウル市から来日され、



左 菅原理事長 右 崔昌根さん

慰霊祭においては、遺族代表として玉串奉奠をされた、崔貞根（日本名高山昇）陸軍中尉（陸士56期・飛行第66戦隊・昭和20年4月2日沖繩周辺洋上に於いて特攻戦死・後掲の編注参照）の弟崔昌根さんが参列されたこと、また、崔貞根中尉の婚約者であった梅沢ひでさんの姉妹等に当たる高橋せつ子さん、藤岡つね子さん、高橋富士夫さん、高橋節子さんらも参列され、念願の、崔貞根中尉の弟昌根さんとの再会を果たされたことである。人の世の縁の深さを思うと共に、英霊もさぞ喜びのことと推察する。

なお、この懇親会には、若い学生達



が数名参加していたが、各テーブルでは、特攻について、あるいは日本人の心や教育について語り継ぐとする老兵達の話に熱心に耳を傾けていた。これもまた特筆に値することであった。

(飯田正能記)

◇ ◇ ◇

〔編注〕① 崔貞根(日本名高山昇)中尉の所属した飛行第66戦隊―フィリピンのレイテ作戦で消耗した飛行第66戦隊は、昭和19年12月25日、戦力回復を図るため、空中勤務者と一部の整備員はクラーク基地を出発、台湾を経由して昭和20年1月1日銚子に帰還した。

同日、航空総軍の指揮下に入り、銚子及び銚田各飛行場で隊員と飛行機を充足して訓練を重ね、同年3月万世に移動した。昭和20年3月29日未明、飛行第66戦隊4名が徳之島飛行場から出撃、今田義基少尉と森次曹長が敵の大型戦艦に突入し、散華。島崎昭二軍曹、播磨勝三郎軍曹も壮絶な戦死を遂げた。同年4月2日午前4時30分、同隊7機が同じく徳之島飛行場から出撃、高山昇中尉、飯沼良一軍曹搭乗の九九式襲撃機は、沖繩西方海上で、陸軍計2隊10機、海軍計3隊42機と共に突入。戦車揚陸艦・高速輸送艦各1隻を撃沈し、揚陸戦用輸送艦1隻を戦列復帰不能にし、揚陸戦用輸送艦3隻・

歩兵揚陸艦1隻に損傷を与えた。

② 朝鮮・台湾出身特攻戦死者―特攻戦死者のうち、朝鮮及び台湾出身者の階級・出身・生年・突入日が判明している者は14名。全員が日本名を名乗り、士官学校を始めとする各課程を終了して特攻隊員となり、散華していった。

朝鮮・台湾地区に対する徴兵制度については、昭和13年2月、陸軍特別志願兵制度が設けられ、予備訓練も始まっていた。昭和18年の兵役法改正に伴い朝鮮地区に対して徴兵制が施行されることになり、翌年に徴募が開始された。また、同年9月23日の閣議決定により

台湾にも徴兵制が敷かれ、昭和20年度から実施されることになった。14名の特攻戦死者は、徴兵制の適用を受け、士官学校・特別操縦見習士官・少年飛行兵など軍人への道を自らの意志で選択し、特攻で散華した。このように、陸軍は朝鮮・台湾出身者に対して日本人と区別することなく、当時の少年達の憧れの対象であった少年飛行兵その他への門を開いた。(株サ・メデアジョン発行『陸軍特別攻撃隊の真実・只一筋に往く』より)

『千の風になって』

日本語訳詞・作曲 新井 満

私のお墓の前で／泣かないでください  
そこに私はいません／眠ってなんかいい  
ません

千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています

秋には光になって／畑にふりそそぐ  
冬はダイヤのように／きらめく雪になる

朝は鳥になって／あなたを目覚めさせる  
夜は星になって／あなたを見守る

私のお墓の前で／泣かないでください  
そこに私はいません／死んでなんかいい  
ません

千の風に／千の風になって  
あの大きな空を／吹きわたっています

千の風に／千の風になって  
あの大きな空を／吹きわたっています

千の風に／千の風になって  
あの大きな空を／吹きわたっています

千の風になって

I am a thousand winds

日本語訳詞 新井満 作曲新井満 原作詩(英語)者不明

1. わたし  
2. あき

の おはかの 一ま えで なかないでくださ い  
は ひかりに 一な って はたけにふりそそ いく

ここに わたしは いません ねむ ってなん か いませ ん せん  
ふゆは ダイヤの ように き らめくゆ きにな る あさは

か げ に せんのか げになっ て あ  
とりに なっ て あなた を めざめさせ る

の おおきな 一そら を ふきわたって いま す  
よるは ほしにな 一っ て あなたを 一み まも

3. す あ の おおきな 一そら を ふきわたって いま す

# 靖國神社遊就館前の「特攻勇士之像」を仰ぎ見て

靖國神社遊就館前に南面して建つブロンズ製特攻勇士の像は、その構図といい、その容姿といい、誠に凛々しい若武者振り、数ある特攻勇士の像の中でも随一の傑作と言えよう。飛行帽を風に靡かせ、大空をきつと見上げて決意の程を眉宇に漲らせ、しつかと大地を踏み締めて立つ。何ものをも怖れず、怯まず、只一筋に征く若き特攻隊員の決意の程を良く表現している。

それもそのはず、この「特攻勇士之像」の制作には、高名な二人の文化勲章受章者が関わっているのである。すなわち、彫刻界の巨匠北村西望先生と日本画の泰斗大山忠作先生である。お二人のうち、北村西望先生については、この「特攻勇士之像」の建立除幕式を伝える会報「特攻」第39号(平成11年5月発行)で触れられており(14頁)、また、その台座の裏の左下に、小さな銅板ではあるが、「原型製作 文化勲章受章 北村西望、拡大監修 日本芸術院会員 北村治禱、拡大制作 石黒光二、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、建立 平成十一年三月二十三日」と刻まれた銘板が嵌め込ま

れているので、御存じの方も多しと思われるが、台座表面の銅板に「特攻勇士之像」と刻まれた銘文の揮号者がどなたであるかについては、触れられていない。御参考までに、当該会報記事に掲載すれば、次のとおりである。

その揮号者は、平成18年の文化勲章



特攻勇士之像完成

英霊たちの声

その真実の響き

会員 長澤政輝

仰ぎみる特攻像  
決意こめた眉宇  
悠揚迫らぬ容姿  
愛しき親兄弟を護る為  
後に続く者を信じて  
征きしをここに鎮まる

美しい文化財であったのだから。ともあれこのたびの特攻勇士之像建立は、誇りに満ち、憾みに充ちた今世紀日本の掉尾を飾る「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」陸海共同の快挙といえる。

かつて私が直接お会いした特攻勇士といえば、仙幼先輩の山本卓美中尉(のち「階級特進」)である。母校へお別れに見えた東の間の邂逅であったが、のちに遺詠がとどく。

わが後に続かん者のあまたあれば  
永久に揺るがじ大和島根は  
しみじみと拝誦し、自分も何とか見られるような辞世を遺して後に続こうと感奮興起させられたものである。

戦後私は、出版物や記念館でおたぐさんの遺書や遺詠に接し、若武者たちの立派な文学的素養に感心するばかりだ。

受章者大山忠作画伯(特操三期)であり、同画伯は、平成4年に第12代日展理事長に、平成17年には初代日展会長に就任された日本画壇の重鎮であられる。同画伯が「特攻勇士之像」台座銘板の揮号を引き受けられたについては、次のような経緯がある。

平成11年初め頃、当協会の最上理事長(当時)から靖國神社の大野俊康宮司(当時・第七代宮司)に、台座銘板の揮号依頼を大山画伯に取り次いでもらえないかとの電話があり、大野宮司が早速連絡を取られるところ、御多忙中、しかも日時が切迫しているにも拘らず御快諾くださったとのことである。こ

兼ねて協会の事業として計画していた靖國神社境内にこの像を建てること  
が実現し、3月23日に瀬島会長以下69  
名が参集、神社側からは湯沢宮司以下  
の出席を得て除幕式を行った。設置場  
所は遊就館玄関に向かって右の植込み  
の中である。

凛々しい特攻勇士像が建った。しかも  
も原型は巨匠北村西望氏というのだけ  
ら嬉しい。

もちろんこの像は、あらゆる兵科、  
あらゆる戦場で散華された英霊への頭  
彰のシンボルとして、末永く愛されて  
ゆくだろう。

そういつては悪いが、大村益次郎ど  
のでは私たちが世代の実感として少し遠  
過ぎたし、今となっては、あの須田町  
の広瀬中佐像などを戦犯美術と断罪し  
て毀したりせず、せめて靖國の境内に  
移されていたらと、惜しまれてならな  
い。当代の名手が、心魂を捧げつくし  
りだ。

特攻像は何を見給うや

よしや身は千々に散るとも来る春に  
また咲き出でん靖國の宮

(義経空挺隊関三郎軍曹)







# 大山忠作 思い出のアルバム

東京美術学校繰り上げ卒業。入隊。埼玉県で特別操縦見習士官(三期)となり、航空部隊に配属。台湾にて終戦。

昭和21年(1946)復員。第2回日展に「〇先生像」を出品、初入選。

昭和22年(1947)一采社に参加。以来山口蓬春に師事。

昭和27年(1952)第8回日展「池畔に立つ」が特選、白寿賞、朝倉賞を受賞。

昭和30年(1955)第11回日展「海

浜」が特選、白寿賞を受賞。外務省委嘱「桜」を制作。

昭和31年(1956)遠威の小川知子と結婚。

昭和32年(1957)山田申吾、加藤東一と三珠会結成。長女采子誕生。

昭和34年(1959)長男昌作誕生。

昭和35年(1960)第3回新日展に審査員となり、「漁」を出品。

昭和36年(1961)一采社発展的解消。第4回新日展に「無」を出品。日展会員となる。

昭和37年(1962)初の個展を文藝春秋画廊で開催。

昭和38年(1963)ヨーロッパ旅行に出发。帰国後肺結核で約1年療養する。

昭和42年(1967)安田靫彦、前田青邨による法隆寺金堂壁画画模写に参加。

昭和43年(1968)第11回新日展に審査員として「岡潔先生像」出品、文部大臣賞受賞。インド東南アジア旅行。

昭和46年(1971)改組第3回日展に「浄光」を出品。師・山口蓬春逝去。

昭和48年(1973)第29回日本芸術院賞受賞。

昭和50年(1975)日展理事に選出

される。

昭和53年(1978)日展70周年記念展企画委員。

昭和54年(1979)日展参事。昭和55年(1980)成田山新勝寺光輪閣襖絵完成。

昭和56年(1981)日展理事に選出される。「大山忠作・日月春秋」展開催。

昭和57年(1982)「大山忠作画集」(講談社)刊行。

昭和59年(1984)成田山新勝寺光輪閣襖絵第二期が完成。「大山忠作襖絵展」開催。

昭和61年(1986)日本芸術院会員に就任。

昭和62年(1987)「大山忠作画集・画業四十年の歩み」開催。

平成4年(1992)第12代日展理事長に就任。

平成5年(1993)画業五十年記念「大山忠作画展」開催。

平成6年(1994)「大山忠作画集」(朝日新聞社)刊行。

平成17年(2005)初代日展会長に就任。

平成18年(2006)文化勲章受章。



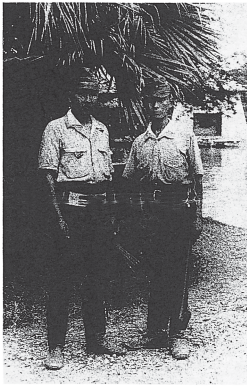
昭和19年 台湾にて 22歳



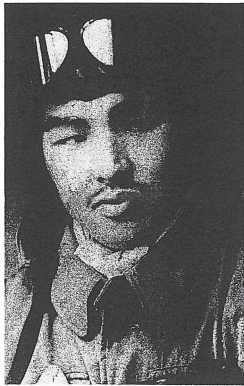
昭和17年 幼馴染の親友と 20歳



昭和12年 兄の入習時に 15歳



昭和20年 台湾にて 23歳



昭和20年 台湾にて 23歳



昭和20年 台湾にて 23歳



## 東京大空襲 —勝者の論理・敗者の卑屈—

昭和20年3月10日子丑の刻、栄光の陸軍記念日であるべきこの日、首都は忽ちにして紅蓮の焰と猛煙に包まれ、阿鼻叫喚の焦熱地獄と化し、10万市民の無残な死体に覆われた。東京大空襲である。

今年はいずれから63年、未だに行方不明の肉親、親族、知人を捜して、毎年3月10日に春季慰霊大法要が営まれる都立横網町公園（墨田区横網2丁目・関東大震災時の旧陸軍被服廠跡）内の「東京都慰霊堂」を訪れ、犠牲者の名前や伝を捜し求める多くの人々の姿が見受けられる。そして「東京大空襲犠牲者名簿」への登載者数も年々数百名ずつ増えているという（この犠牲者名簿は、同公園内の「東京大空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」の中に納められているが、今年3月現在、34巻7万8440名となっている。だが、不明者はまだ2〜3万名に上るといふ。なお、軍人、軍属であった方については「東京都戦没者霊苑」（文京区春日1丁目）において慰霊追悼が行われている）。

この日夜来の雨も上がり、一入清浄

の気に包まれた横網町公園内の東京都慰霊堂には、朝から大勢の人々が参拝に訪れ、献花・焼香の列が長く続き、堂周辺に香の薫りが漂っていた。午前中堂内で執り行われた財団法人東京都慰霊協会主催による都内被災遭難者及び関東大震災遭難者の「春季慰霊大法要」には、常陸宮正仁親王殿下・同妃華子殿下を始め被災者や遺族代表ら約320名が参列し、読経の後、石原慎太郎都知事が「恒久平和と永続的な安全を実現するために、我々は一層努力すると共に、戦争の悲惨さを語り継ぎ、平和な世界を次の世代に引き継いで行かなければならない」と追悼の辞を述べた。この日は「東京都平和の日」（平成2年制定）でもある。その後、参列者及び一般参拝者の献花・焼香は午後に至るまで延々と続いた。また、この日は、慰霊堂後方の納骨堂が開扉され、身元不明の約10万5400柱の犠牲者の冥福を祈る献花・焼香者の列も延々と続いていた。

この日は、同公園内にある「東京都復興記念館」内で通常の展示品のほか「東京大空襲資料展」が開催され、多くの写真、絵画、遺品、記録等が展示されていたが、特に夥しい残酷な焼死体の写真には、鬼哭・妖気の迫る感があり、目を覆わしめるものがあつた。東

京都慰霊協会の資料（戦災焼死者改葬事業始末記）によると、3月10日の東京大空襲の死者約10万のうち身元不明者は約90%に及び、しかも身元不明者総数8万9430人（当時の35区内）のうち男女の識別遺体は3万817人に過ぎず、残りの5万8613人は識別不能遺体で、約66%に及び、男女の識別すらできない、黒焦げの死体や焼け崩れてゴミと化した死体が山をなしたという。これらの不明遺体は、被災直後に都内数十箇所仮埋葬され（例えば錦糸公園1万3951体、猿江恩賜公園1万3242体、上野公園8391体、隅田公園6374体ほか）、その後数年をかけて調査、焼骨して、この慰霊堂に納骨されているという。慰霊堂には、その後の空襲犠牲者を合わせて10万5400体が納骨されている。

「東京都戦災史」（昭和28年3月発行）によると、東京大空襲は、昭和17年4月18日の初空襲（ドーリットル中佐指揮のB25陸上爆撃機16機が東京を奇襲。荒川・王子・小石川・牛込の各区で被害家屋計61戸、死者0）を皮切りに昭和19年11月24日以降は連日のようにB29重爆撃機や艦載機による襲撃が続き、昭和20年8月15日の西多摩郡青梅町空襲まで115回に及び、被害総計は、被災家屋76万7164戸・死者

9万5507人に達している。中でも3月10日の下町を中心とする大空襲による焼失家屋は26万8358戸・死者8万3793人に及び、この数は1回の空襲による被害数としては、第二次世界大戦中最大規模のものであり、広島原爆による被災数をも上回っている。東京では、その後も大規模空襲が続き、主な空襲では、4月13日〜14日の被災家屋17万1370戸・死者2459人、4月15日〜16日の被災家屋5万874戸・死者841人、5月25日の被災家屋15万6430戸・死者3242人、8月1日〜2日の八王子・立川方面の空襲では被災家屋1万4147戸・死者225人を数え、遂に東京は灰燼に帰した。しかも犠牲者の大方は非戦闘員であつた。

昭和19年7月7日、我がサイパン島守備隊が、総指揮官南雲忠一海軍中将与陸上部隊（名古屋・第43師団基幹）指揮官齋藤義次陸軍中將の「吾等ノ屍ヲ以テ太平洋ノ防波堤ヲ築カント欲ス」との決別電を前日に発し、奮戦闘の末、遂に玉砕して以来、米軍は同島のアスリート飛行場を中心として航空基地の整備を図り、B29爆撃機による日本本土の爆撃態勢を整えて、第1回の本格的東京大空襲を実施したが、昭和19年11月24日であつた。



東京都慰霊堂全景・後方納骨堂・右手前追悼平和祈念碑



東京都慰霊堂正面



納骨堂に献花・焼香する参詣者の列



花に覆われた追悼平和祈念碑

米陸軍航空隊第21爆撃団(司令長官アーノルド大将、参謀長ノースタッド少将)のサイパンにある現地爆撃隊司令官ハンセル少将は、あくまでも正攻法である軍需工場等中心の精密爆撃を主張し、実行したが、なかなか所期の成果を上げることができなかった。業を煮やした爆撃団司令部は、予て周到に準備していたM69型焼夷弾等による都市の無差別爆撃を実施すべく、突然ハンセル少将を解任し、かねがね無差別絨緞爆撃の実施を主張し、欧州戦線で活躍していたカーチス・E・ルメイ少将を現地爆撃隊司令官に任命し、その機を狙って着々準備を進めていた。

3月9日夜、サイパン、テニアン、

グアム3島の基地を飛び立った334機のB29重爆撃機の大編隊は、途中、今なお死闘の続く硫黄島の砲焰を眼下にしつつ、伊豆・房総半島を北上して東京上空に達し、隅田川を挟む下町一带約27平方kmの焼失予定区域に高度平均2kmの低空から50フィートの間隔で約32万発、2千トンのM69型焼夷弾及び爆弾を投下した。折柄の強風と火災による局地的暴風に煽られて火は忽ち燃え広がり、猛火となって一帯を舐め尽くし、焼失地域は予定の約1.5倍の41平方km、首都の4分の1を焦土と化し、死者約10万、負傷者約12万、焼失家屋約26万8千戸という未曾有の大災害を生ぜしめた。

新聞やテレビ番組等で、この空爆に参加した元米軍パイロット達も、大火災による余りの熱さと異臭、突き上げられた熱気流に、操縦もままならぬ状態であったと証言している。後に慰霊堂や空襲資料展の悲惨な写真を見た元米軍パイロット達もさすがに目に涙を浮かべていたが、それでも彼らは「祖国のために日本を攻撃したことに後悔はありません。戦争がまた起きたら戦うでしょう」「自分達のやったことが間違いであったとはどうしても言えない。なぜならば、それはこの戦争で命を落とした戦友の死を無駄にするからだ」と言い切っていた。

一方「戦果を上げるためにはどんな

ことでもやる。日本本土の焼夷戦術は結果として日本の降伏を早め、それによって彼我百万人の命を救ったことになるのだ」と言っていたルメイ将軍は、後年「もし我々が負けていたら、私は戦争犯罪人として裁かれていただろう。幸い、私は勝者の方に属していた」と語っている。このルメイ将軍に対し、日本政府は、昭和39年東京オリンピックの年に、航空自衛隊の育成に協力した功績に対してということで、勲一等旭日大綬章を贈っている。何という歴史認識の甘さ、敗者の卑屈とも取れる行為ではないか。空襲犠牲者の御霊や遺族の感情を逆撫でする行為ではないか。(飯田正能記)



## 前号の「靖國神社年越し詣で」を読んで一筆

田中 賢一

小泉純一郎元首相が、16年の長きに亘り中断していた総理の靖國神社参拝を表明して以来、それに反対する言動が政府内外に蠢動していた。しかし平成13年には8月13日に、14年には4月21日、15年には1月14日、16年には1月1日、17年には10月17日とまがりなりにも1年に1回は参拝していた。それも最後は、我々が渴望していた8月15日に参拝し、内外の批判を一蹴してくれた。その後継者と信じていた安倍総理はあいまい戦術を唱え、持論の「総理の参拝」を実行しないまま退陣してしまい、次の福田総理に至っては、就任早々「靖國神社には参拝しない」と明言した。

お尋ねするが、総理大臣は自衛隊の最高指揮官ではないのか、昭和36年に制定された「自衛官の心がまえ」には「身をもって職責を完遂する覚悟がなくてはならない」と言っており、その前に「自衛隊は万一侵略が行われるときは、これを排除することを主たる任務とする」と示してある。甚だまわりくどい表現だが、戦争になったら身を賭して戦え、ということだ。身を賭して戦い戦死した人を祀ってある所に参拝しないぞと言つて、最高統率者の任務が務まると本当に思っているのか。軍事裁判の殉難者、彼らの言うA級戦犯が祀つてあることに、中国や韓国が文句を言うのに怖じ気づいているのだ。このことについて少し遡つて観察してみよう。

昭和60年8月15日に時の中曽根首相が参拝したら、戦犯を合祀してある靖國神社に参拝したとて中国に文句をつけられ、翌年からやめてしまった。その後の橋本首相は日をずらしたり、恐る恐る参拝したら、また中国から叱られた。その後は日中友好を害するとして小泉首相まで総理大臣の参拝は行われていない。中国の古来の中華思想が脈々と伝わっている。自らを尊しとなし周囲の異民族を卑下する風習が、今もって滲みついている。東夷西戎南蛮北狄の一部である日本が、かつて自國を制覇し、今は経済的に優位に立っている。堪え難い思いがするのであろう。それに一党独裁で野党がない。国民の不满による政権の交代ということがあり得ない。不平不満が昂ずれば暴動以外に捌け口がない。従つて対外的に強硬に出ることは、国民の不平不満を逸らす手段として使われる。日本の首相を叱りつけることなど、絶好の対内的な点数稼ぎとなる。

憤慨に堪えぬというのは、そんなことではない。支那四千年の歴史を知る我々は、大人になればそんなことは見逃せる。見逃せないのは、日本国首相の心構えである。

そもそも昭和殉難者（戦犯刑死者）を合祀したのは歴とした根拠がある。戦前は靖國神社は國の管理下にあつたので、合祀の決定は陸軍省と海軍省が行つた。ところが敗戦により軍がなくなり、占領下靖國神社は一宗教法人にさせられてしまった。そしてGHQの厳しい監視下であり、合祀どころではなかつたが、占領が終結した後、お國の為に亡くなつた人を早急に合祀すべきであるという声が、遺族会や戦友など之間に沸き起こつた。そこで、戦没者接護業務を担当している厚生省は、都道府県の協力を得て合祀者を決定し、名簿を神社に渡して宗教法人である靖國神社が、毎年合祀するというルールが確立した。しかし、厚生省にも合祀に該当するか否かの判断に法的根拠がないと困るので、「戦傷病者戦没者遺族等接護法」と「恩給法」のいずれかに該当する者という基準をたてた。従来は合祀は軍人軍属だけだったが、援護法の適用範囲が広がるにつれ、戦争中に國家の為に命を落とした者や、國の命令によつて行動中に死亡した者にまで拡大したので、その人々も御祭神となつた。

例えば、空襲下殉職した警防団員とか、対馬丸で海没した沖繩の疎開児童などが該当し、合祀された。

さて、戦犯刑死者も「援護法」や「恩給法」の対象とすべきであるという議論が高まり、28年8月に法律が改正され、戦犯刑死者の遺族にも戦死者の遺族と同様に遺族年金が支給されるようになった。戦争犯罪人といつても、日本が主権を失っている時期に戦勝國が勝手に裁いたもので、日本國の法律に違反したのではないので、遺族援護法が適用されるのは当然のことである。このようにして戦犯刑死者も合祀の途が開け、逐次に名簿が厚生省から送達され、合祀されるに至つた。

中國が難癖をつけている所謂A級戦犯については、刑死した七柱のほか未決で取監中に死亡した人と受刑中に死亡した人、合計十四柱が合祀された。このように民主主義に則り、国会で援護法の改正が行われ、その結果A級戦犯と言われた人も合祀されたのに、中國の言い掛かりに屈している日本の首相は、果たして独立國の首相と言えるだろうか。首相の参拝を行うための環境整備として、所謂A級戦犯の分祀とか、靖國神社の特殊法人化などを唱える政府首脳がいるが、これこそ不戦敗と言ふべきである。

**一歩兵兵士が目撃した特攻機**  
**（歩兵第75聯隊戦友会誌『戦争回顧録—その3—』・「ナギリアン・ロード」より）**

篠原 勇

〔編注・この記事の著者篠原勇氏は、昭和17年北朝鮮会寧の歩兵第75聯隊に入営、虎兵团（北朝鮮羅南第19師団）隷下、虎第8505部隊・機関銃中隊に所属、乙種幹部候補生となり、フィリピン・ルソン島に派遣された。

戦局利あらず、リングエン湾沿岸のサンチャゴからバギオに向けて撤退中の昭和20年1月8日、山道から遙か彼方のリングエン湾で、物凄く弾幕下、敵艦船に突入する特攻機を目撃した。

この度、全国歩兵第75聯隊戦友会誌『戦争回顧録—その3—』に一文を寄稿されたが、その中の一章「ナギリアン・ロード」を、同氏等のご了承を得て転載させて頂いた。

なお、昭和20年1月8日、リングエン湾の敵艦船に突入、散華されたのは、『特別攻撃隊』（第四版）によると、皇魂隊（二式双襲）の三浦恭一中尉（陸士56）、倉知政勝曹長（操縦下士90）、寺田増生伍長（少飛13）の三柱である。」



一 ナギリアン・ロード

海岸線の陣地を撤収した北朝鮮会寧の歩兵第七十五聯隊（戦時編成虎兵团第八五〇五部隊）第二大隊は、リングエン湾に面する「サンチャゴ」から、もと来た道を数キロ引き返し、パウアンの三叉路を東の方向バギオに向かって行軍し、零戦が不着していた飛行場を右に見て、ナギリアンの街を通過、ブルゴス、サブラン、エリサンと傾斜の厳しい山岳の道を登った。

ナギリアンの街の人家から、分隊の兵隊が手押し車だったか、水牛に牽かせる車だったか分からないが、荷車を一台見付けて来た。これに、途中で拾った吠（かます）に入った日本産の精米一俵と各人の背嚢を積み、分隊全員で引いたり押ししたりして坂を登った。重機と弾薬は馬に積み、馭兵が後に付いた。サブランの坂は曲がりくねった急峻である。余り無理して沢山積んだので、途中で車の心棒が折れてしまった。

残念ながら荷車を捨てて全員背嚢を背負ったが、吠に入った米は持つことが出来ず、本当に悔しかったが、捨てるに忍びず、通過する軍用トラックの荷台に乗っていた他部隊の兵隊にくれてやった。彼等は喜んで車に積み、エンジンをふかしながら我々を追い越して行った。

エリサンの部落に差し掛かった頃、登って来た背後を振り返ったところ、海面に隙間なく浮かぶ敵艦船が、一斉に空に向かって弾幕を張っていて、空一面が真っ黒であり、その音は物凄く

百雷が一度に落ちる如き様相であった。その中を友軍の特攻機が水平飛行しているのが望見された。戦果までは確認出来なかったが、今次戦闘期間中最も感激し頭の下がる思い出の一つである。

偶々終戦後数十年を経たある時、私は茨城県の鹿島灘の海岸を車で走っていた。一面芋畑の続く一面に、銚田陸軍飛行学校跡の標識を発見した。車を停めて近寄れば、この学校を卒業して特攻隊員となり、若き生命を日本国のために捧げて散華した英霊の名前と戦死した年月日・地名が慰霊碑の一面に刻まれていた。その一人ひとりを目で拾って行くと、何とフィリピンのリングエン湾において、昭和二十年一月八日の日付の下に、次のような要領で五名の氏名が明瞭に刻まれていた。

数多い戦記物の中に特攻機の事が多いが、英霊の氏名・年月日・場所まで記載されていることは殆ど見たことがない。よって、この事実を特に明記し、少しでもご供養の一端になればと思いい、次に記載し、感謝の念を表明していた。

てお祈りするばかりである。勿論、西太平洋・沖繩戦等大勢の英霊の氏名も刻まれていた。

フィリピン リングエン湾  
 昭和二十年一月八日

皇魂隊 三浦 恭一  
 倉地 政勝

寺田 増生  
 春日 元喜（一月六日）  
 入江千之介（一月十日）

バギオという地名は松の杜（もり）という現地語だと聞かされていた。サンフェルナンドからバギオまでは約四十キロメートル、総て登りの坂道であり、海拔千五百メートルで、暑いマニラの夏期に於ける米国政府の移転先として、アメリカの植民地統治時代に発展した処である。途中の地名は総て終戦後戦跡巡拝を続けるうちに知り得たものであり、行軍中は全く知らない山道としか覚えていない。

特攻機を見送り、夜通し歩いて朝霧の立ち込める峠に到着。少しづつ明るくなる濃い松の緑に覆われたバギオの街が別世界の如く眼下一面に見渡すことが出来た。赤い屋根や青い屋根などこの世とは思えない光景が広がり、静かに夜の帳（とばり）の明けるのを待っていた。



## 海軍神雷部隊

## 人間爆弾「桜花」体験記

(甲飛会会報第82～83号より)

「編注・本稿は、甲飛会会報「甲飛だより」第82号及び第83号に連載されたものであるが、同会のご了承を得て転載させていただいた。」

## 桜花隊の生き字引

浅野昭典氏（甲13期・松山空前期―諫早空・飛練38期操縦―721空―722空―725空・桜花）に初めてお会いしたのは、浅野氏と諫早空の飛練まで同じコースだった小池耕一氏（甲13期・松山空前期―諫早空・飛練38期―松島空・美幌空・陸攻）に伴われ、浅野氏の自宅（横浜）まで取材に出かけた時である。

小池氏が自分達の飛練の会を作ると



パイロット姿の浅野さん

言うので、その頃厚生省で甲13期全員のことを調べていた私（甲13期・高塚篤）は、松山空前期の本籍地の

判明した人を次々、小池氏に知らせていた。その代わり、諫早空で特殊な配置に就いていた人を見付かったら、紹介するという交換条件であった。

その第一号が神雷部隊に行ったという、同期生としては凄まじい経歴を持つ浅野氏の紹介であった。

さぞかし荒ぶれた気風を多分に残した人で、下手に質問したら嘸み付かれそうな虞さえ抱いての訪問であった。案に相違して浅野氏は真面目そうな人で、現在の仕事が忙しく、軍隊のことは余り覚えていないと、戸惑った様子さえ見られた。

それでも断片的に話してくれたが、話すうちに次第に記憶が甦るのか、彼が辿った721空（神雷部隊桜花11型隊）、722空（龍巻部隊桜花22型隊）、そして725空の桜花43乙型隊と、桜花隊全体の様子を話してくれたのであります。

## 暗い春

人が中に入って操縦できるようにし

た人間爆弾を、一式陸上攻撃機が抱いて敵艦近くまで運び、投下して体当たり攻撃を敢行するという神雷部隊のことは、昭和20年春頃から話題になった。その話には枝葉が付いて、人を爆弾に入れたら、外からハンダ付けにしてでられなくするとまで言われるようになった。

その頃、飛行機の搭乗員は全員特攻隊となり、体当たり攻撃をするのは当たり前前のことで、むしろ名誉にさえ思っていたから、その噂は神雷部隊だけではなく、特攻隊全部に対して付けているような感じに受け取れた。

「絶対でたらめだ。国のため人間爆弾となつて体当たりをしようという人間に、そんなことをするはずがない」「いざとなつたら爆弾から出たがる人もいるかもしれない。そうなつたら他の人に示しがつかなくなるから、万一のことを考えて、みんなを閉じ込めることにしたのではないか」などと、どこから出た噂か分からなかったが、人間爆弾が他の特攻隊とは違う凄さを強調するために生まれた噂ではなかったかと思われる。

甲13期生が、噂になつた人間爆弾の特攻隊員になつていたとは、戦後も長い間知らなかった。

戦後かなり経って、軍隊のことを徹底的に調べてみようと思ひ立ち、大勢の甲13期の人に会つて、戦時中の動向について話を聞いて回つた。

その中に神雷部隊桜花隊だった人も何人かおり、その人達が人間爆弾の中に入れられ、ハンダ付けにされる人だったのかと、意気込んで話を聞いて回つた。

ハンダ付けは、根も葉もない噂だと分かったが、今となつては考えられない人間爆弾桜花の、色々な話を聞くことができた。

諫早空38期の操縦練習生は、昭和19年12月下旬、中練教程を終了し、次の実用機教程を受けるため、それぞれの練習航空隊（陸攻、艦攻、艦爆）へ出て行った。

どうしたわけか、一番エリートだと自他共に思っていた戦闘機専修者だけが残されてしまった。

戦闘機の実用機教程の練習航空隊に空きがないのだそう。

それでも、元山空とか13空が近いうちに空くから、連絡あり次第転隊するようにと、その航空隊に行く予定者だけ内定された。

来る日も来る日も、すっかり慣れたはいるが、今となつては忌まじしい中練での訓練が、延長教育として行わ

れた。

1月初旬、38期戦闘機専修者全員集合がかけられた。

戦闘機の練習航空隊が空いたので、それぞれの行く先の航空隊の発表があるのだと思った。

案に相違して、降って湧いたようになつた。

Ⓐ(マルダイ)兵器要員の募集であつた。必死必殺の兵器というだけで、兵器の名前も性能の説明もなかった。白紙を渡され、熱望は◎、命令通りは○、戦闘機でなくては希望せずは白紙のまま、それぞれに氏名を記入して提出した。

浜口(仮名)は、ためらわずに二重丸を記入し、それでは足りない気になり、三重丸を書いた。

山野(仮名)は、子供の頃から飛行機に憧れており、更に零戦に具体化されたばかりであり、折角、戦闘機専修になつてその実現に、後一息というところまで来たのだからと、何も書かないつもりでいた。

氏名だけ書いて提出するのを待っている時、隣の浜口が大きく三重丸を書いているのが見えた。

何も書かないのは自分一人だけかもしれないと思ひ出すと、急に後ろめたくなつて、慌てて二重丸を記入した。

希望のほかに操縦技術、性格、家族構成等考慮され、Ⓐ兵器要員は選抜された。

選抜者は、昭和20年1月15日正午までに、千葉県佐原駅前集合するよう指示を受け、諫早分遣隊を出発した。

「お前の家は横浜だったなあ、寄つてこいよ」と、浜口が山野に言った。

山野が渋っていると、浜口は皆に計つた。「15日までに着けばよいのだから東京近辺に家がある者は帰つてもいいと思うんだが」。早速、賛成の声が上がつた。山野以外にも数名いた。

「家が遠い者はどうする」「海仁会にでも頼めば一泊ぐらいできる。久し振りに畳の上で寝よう」「東京見物をして、映画でも見るか」等々。

東京駅に翌朝7時集合ということになった。

山野は浜口を家に連れて行きたかつたが、浜口が断つた。「俺、がさつ者でお前の両親に会つても挨拶できない。気楽に皆と一緒に泊まる」。

山野の家族は突然の帰郷に驚いた。

Ⓐ兵器要員を志願したことについては、固く箝口令が布かれていたので、それを匂わせるようなことも一切口にしなかつた。

翌朝、家を出る時、母に向かつて拳

手の礼をしたが、彼の何かを訴えたがするような目で、母は悟つたのだろう。山野の顔を凝視するだけで何も言わなかつた。

佐原駅前で、第二郡山空、済州島分遣隊から選抜されて来た同期生(予科練教程を松山空で一一緒に受けた)と落ち合い、迎えに来たトラックに分乗して神ノ池基地に着いた。

721空の司令の訓示を受け、Ⓐ兵器が人間爆弾とも言ふべき体当たり用兵器「桜花」であること、神ノ池基地は桜花の訓練基地で、訓練終了次第戦

場に出撃することになる。721空は「神雷部隊」と称し、桜花搭乗者は「桜花隊」に所属するという。

昭和19年10月に募集選抜されて来た1次の人達の訓練は、かなり進んでいる様子だった。

訓練機の複座の零式練習戦闘機は、練習機ではあつても戦闘機に間違いはない。

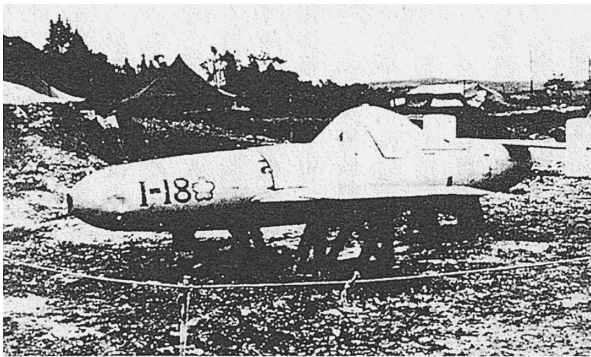
山野は、Ⓐ兵器要員を志願したお陰で、戦闘機に乗ることができた幸せを噛み締めていた。

訓練は、慣熟飛行が終わると、戦闘機の教程訓練を行いながら、桜花の突入訓練として急降下訓練を行う。

1500米くらいの高度から急降下に入る。次第に加わつてくるG(加速によつて生ずる重力。体重と同じ重力を1G)で、思わず操縦桿を握る手に力が入る。

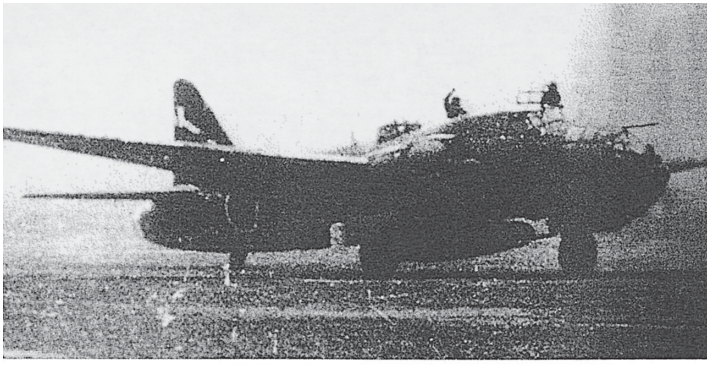
「馬鹿、もつと力を抜け、飛練で何をやっていたか」。後席に同乗している1次の先輩が怒鳴る。地上1000米で操縦桿を引き起こす。目の前が暗くなるような衝撃である。

零式練戦の操縦桿の利きが、中練とは比較にならない程敏感である。心の動きまでが操縦桿によつて機体全体に伝わるように思われた。1次の先輩達は次々と桜花練習機による投下訓練を



沖縄で米軍に鹵獲された桜花





桜花を抱いた一式陸攻機

行った。

橙色に塗った桜花練習機が、一式陸攻の腹から落とされたと見るや、次第に速度を増し、速度が矢のようなスピードになり、青空を斜めに切り裂いていく。この投下訓練は1回切りで、成功した者は出撃者となり、人数が纏まると母機の一式陸攻と共に戦場へ出掛けて行く。

甲13期の桜花隊員達は、複雑な気持ちで1次の先輩達の死の滑空訓練を眺

めた。果たして自分達は、あれだけのスピードに耐えられるだろうか。零式訓練の急降下のGにも慣れない彼らは、その投下訓練を見る度に肌粟立つ程の畏怖感を覚えるのだった。

桜花の投下訓練は1回切りであるため、皆が初心者のように緊張した。1トン余の炸薬を頭部に装填することになるので、練習機の桜花も実用桜花と同じように重くしてあった。その重量のため、加速がつくと物凄いスピードになった。そのため失敗する人が後を絶たなかった。失敗はそのまま死に繋がった。

3月頃から投下訓練終了者は次々と一式陸攻で九州の出撃基地へ飛び立った。連日のように壮行会が行われた。その合間を縫うようにして殉職者のお通夜が行われる。

山野達甲13期の桜花隊員達は、その両方の席に連なっていた。

悲壮なヒロイズムが次第に、甲13期生達にも伝播して行った。

「貴様と俺とは同期の桜  
同じ神雷隊の庭に咲く  
咲いた花なら散るのは覚悟  
見事散りましょ国のため」

胸をかきむしられるような哀切感を伴って「同期の桜」が、何時ごろからか歌われ始めた。

山野は、歌う度に涙が込み上げ、声が上がってしまふのだった。

沖繩戦の神雷部隊の戦果ははかばかしくなかった。ただでさえ速度の遅い一式陸攻が重い桜花を抱いて、途中でグラマンにでも遭遇したらどうすることもできない。

桜花を投下して身軽になっても撃墜されてしまふ。

そのことは最初から危ぶまれていたもので、桜花11型が製作されると直に、もつと速度の速い陸上爆撃機「銀河」に搭載できる、桜花22型の製作が急がれていた。

その見通しも付いたので、2次の桜花隊員は全員、桜花22型の722空の隊員に切り換えられた。

722空の通称は「龍巻部隊」と呼んだ。

新しく隊員になった山野達は、その隊名になかなか馴染めず、外では今まで通り神雷部隊と名乗っていた。

訓練の状況は、前と変わらなかつたし、1次の桜花隊も残っていて、一緒に訓練をしていた。

2次の桜花隊員は、零式練戦から、開戦当時の実戦機であった単座の零戦21型（零式練戦と共に戦闘機の練習機として使われるようになった）に乗って訓練を続行した。技倆の進捗状況に

よって逐次、桜花投下訓練に移るとい

う。その頃は2次の桜花隊員も、すっかり桜花搭乗員になり切っていた。いつ投下訓練をされてもよい覚悟と技倆を備えてきていた。

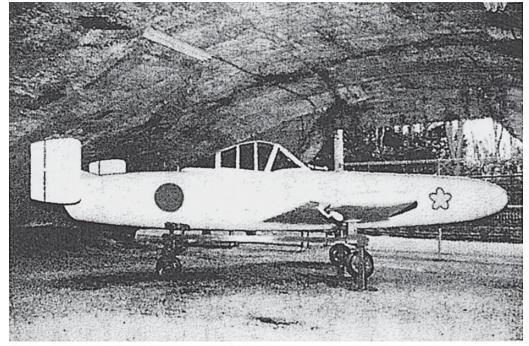
### 投下訓練の再開

昭和20年4月頃に入ると一式陸攻（母機）の燃料が不足がちになり、投下訓練も足踏み状態になる。近いうちに彼らの投下訓練が予定されているだけに気が気でなかった。

一式陸攻はどこかに飛んで行き（八丈島らしい）、燃料を満タンにして帰ってくる。帰ってくると待ちかねたように、滞っていた投下訓練が再開される。浜口が2次の桜花隊員のトップを切って、投下訓練を行った。

一式陸攻に搭乗し、鹿島灘に一旦出て、折り返し、銚子市上空に来た頃、機長が浜口に桜花練習機に乗り移るよう指示する。銚子市と神ノ池基地の間辺りにある射撃場の標的の真上が投下地点である。

浜口は、地上で何回も練習した通りに、桜花練習機の諸装置を素早く点検し、操縦桿を固定してあるターンバックルを外し、操縦桿が自由に操作できるようにする。用意ができたことを、



鹿嶋・桜花公園の展示品

は、際限なく奈落の底に落ちていくような切ない感じであった。

「失敗はそのまま地獄行き」と、飛練の時から言い聞かされている言葉が、生々しい実感となって甦ってくる。浜口の青白く緊張した顔から脂汗が吹き出してくる。

3旋回して、草ぼうぼうの第2飛行場の着陸コースに入る。——このままのスピードで着陸できるだろうか、ともすれば諫早の飛練教程の時、いやと言う程行っていた3点着陸の要領で、上げ舵を取ってスピードを殺そうとしそうになる。——失速しても危険は同じ

——零式練戦や零式21型で、繰り返し練習した接線着陸（2点着陸）の要領を思い出しながら、ようやく草むらの中にのめり込むようにして着陸した。

浜口を皮切りに2次の桜花隊員の投下訓練も、ポツリポツリと行われるようになった。しかし、1次桜花隊員の中に割り込むような訓練であるし、燃料が思うように補給できないのか、一式陸攻もなかなか飛んではくれないので、間延びしがちだった。

2次桜花隊員の中では、浜口から2、3人目の投下訓練予定者になっていく山野の順番は、なかなか廻ってはこなかった。

憧れていた零戦21型に乗るように

なつてから、山野の操縦技術は一段と上達していった。

自分はやつぱり戦闘機乗りに向いていると、戦闘機専修者に選出された時の晴れがましい気持ちも、桜花隊員になつてからも時折頭をもたげてるのを、その都度抑えていた。

「俺は人間爆弾となつて敵艦を轟沈するよう運命付けられている」。

特攻隊中の特攻隊である、神雷部隊桜花隊の隊員になつた時から、すべて生きることに関係のある、夢も希望も喜びも、人間であることも棄て、人間爆弾になり切るための訓練を続けた。

先程まで日本海軍随一の名機とうたわれた零戦21型を、自由に乗りこなせるようになったとは言つても、所詮、桜花を人間爆弾として有効にするための訓練に過ぎない。

「俺は人間爆弾桜花の搭乗員」と、自分に言い聞かせるように口の中で言つてみる。その度に、山野は納得し気分が落ち着いてくるような気がするのだった。

山野の投下訓練の予定日が近付いた頃、浜口が山野にさり気なく言った。「お前、零戦の操縦がえらくうまくなつたじゃないか。隊長もほめていたそうだ」。そして、声をひそめるようにして言った。

宿命だ、運命だと無理やりに自分の

「桜花練習機が、陸攻から落とされる時はおつかねえ。金玉が縮み上がるようだ。重い桜花練習機がそのまま落ちるのだから物凄いものだ。下から強い力で強引に引っ張り付けられていくようで、そのままおさらばかと観念した程だ。しかし、お前の技術なら大丈夫。きつと上手に乗りこなせると思

う」。更に山野にとつて痛いことを付け加えた。「零戦は敏感にできているからな。それに慣れ過ぎたら、鈍感な桜花練習機は却つて扱いにくいかもしれない」。

山野を励ますために浜口は言つたつもりだったが、山野が余り反応しなくなったので、慌てて話題を変えた。

山野にとつて浜口の激励の言葉はありがたかったが、零戦と桜花（練習機）を比較する気持ちがはつきり出てきて慌てた。

桜花は人間爆弾だから、鈍感と言うより心を通わせることなどできるわけがない。俺はやつぱり操縦桿一本で、機体の隅々にまで心を通わせることのできる零戦が好きだ。だのにもうすぐ桜花練習機の投下訓練を行い、それが成功すれば否応もなく桜花と一体となつて、敵艦に体当たりをしなくてはならない。

宿命だ、運命だと無理やりに自分の

モールズ信号で、一式陸攻側に合図する。

一式陸攻内では、偵察員が照準器を覗いて目標が視野に入るのを待つ。投下が早過ぎても遅過ぎても、自力で飛ぶことのできない桜花の着陸に支障を来す。その支障は、桜花搭乗員の死命を制する。

「用意」、心の中で秒読みをするようにして、目標点をキャッチし、「テー」と、ボタンを押すと、桜花練習機を固縛していた鋼索が爆薬によって切断され、桜花練習機が投下される。

固くなつて操縦桿を握っていた浜口は、母機から放たれた瞬間、5、6米落下するのを感じた。しかし、実際に



想念を桜花に結び付けてしまおうとするが、すればするほど零戦のナイーブな操縦感覚が鮮明に甦ってくるのである。

山野の投下訓練の日がやって来た。頼もしくでつかい一式陸攻に搭乗し、機長に届け、指定された席に着く。

「誰だっやってやっているんだ。固くないで普段通りにやれば絶対大丈夫」と、ベテランの偵察員が、山野の強張ったような顔を見て言った。

山野が頭の中のチャートに描いたのと同じコースを飛行し、やがて銚子市上空に差し掛かった。桜花練習機に乗り移る地点である。

「しっかりやれ」

機長が彼の肩を軽く叩いた。機上の搭乗員全員の視線を背中に感じながら山野は、母機にフック一点で吊り下げられている桜花練習機に乗り移るべく、母機の床を開けて下を見ると、桜花機の風防が見え、凄い風圧で、しかも地上も見える。風防を開け、床よりぶら下がって乗り移る。そして、操縦装置を固定してある部品を取り外し、ベルト着用、操縦桿固定ワイヤーを取り外し準備完了のモールス符号「セ」(整備完了)を打ち、後は母機より投下地点にて「・・・」終止符で(計器盤に同様赤ランプ点滅)投下され、

時速約200 Km/h位で桜花機はそのまま200~300 m落下し、速力をつけて着陸コースに入り、最高時速500 Km/hで、着陸態勢では車輪がなく櫛で着速200 Km/hで草原の飛行場に着陸し、桜花機での特攻隊員の切符を手にした。

### 725空が編成さる

桜花22型の製作は急がれていたが、その進捗状況は、はかばかしくなかった。そのほかに潜水艦から発射する桜花43甲型、地上基地からカタパルトで発射する桜花43乙型が考案された。

搭載する飛行機の消耗も激しく、燃料も底を付いてしまった。沖縄戦も絶望の様相を呈している。次は本土決戦である。ドイツのV兵器に似た桜花43乙型は、決号作戦(本土決戦)にうつつつけの兵器に思われた。

未だ試作段階に入ったばかりであるのに、そのためのカタパルトが考案され、三浦半島の武山と比叡山のそれぞれの山頂付近に建造された。

特に比叡山のカタパルトは訓練用として、下の滋賀空の飛行場を整備し、山上のカタパルトから射出した桜花練習機を着陸させることが考えられた。一式陸攻も銀河も思うように使えなくなった現在、飛行機から桜花を投下

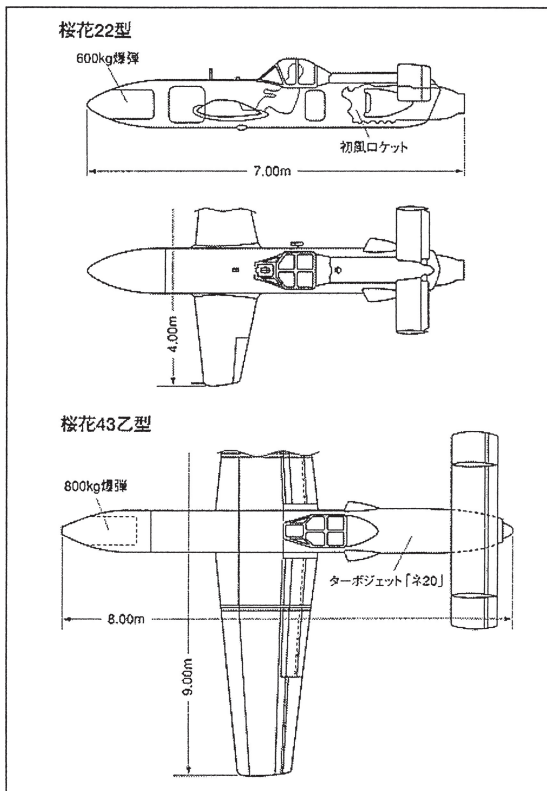
する代わりに、カタパルトから発射するのである。

桜花43乙型の搭乗員は、投下訓練の終わった者を充てることにし、7月23日、725空が滋賀基地で編成された。しかし、投下訓練終了者は僅かな人数である。桜花43型射出用のカタパルトは、超特急工事として房総半島、東海地方、紀伊半島に数十基作られる予定であったが、1基のカタパルトから少なくとも桜花10基を射出するとしても、桜花43乙型搭乗予定者は、その1割にも満たない。

急遽、725空桜花隊員の補充が行われた。艦攻、艦爆の実用機教程を卒

えた者(甲13期が大半を占めていた)を、投下訓練終了程度の技術ある者のみなし、直接725空桜花隊に編入した。

桜花43乙型は、日本海軍が決号作戦に臨んで、最後の望みをかけた兵器の一つであった。にもかかわらず、桜花43乙型(その練習機も)は、終戦までに、725空へは届かなかったのである。

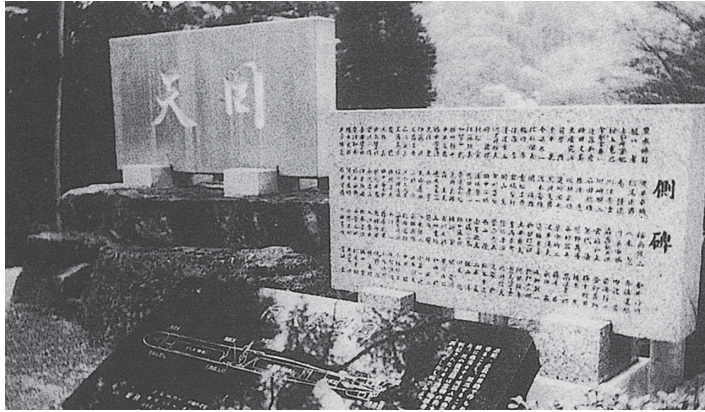


碑は語る特攻隊⑥

下呂信貴山頂

田中 賢一

回天 碑



昭和五十五年五月吉日

回天会

下呂信貴山頂 回天碑側碑

東海回天会設立

碑文

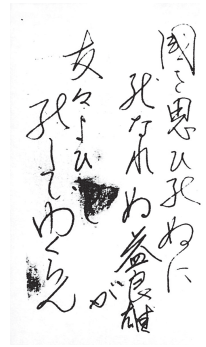
大東亜戦争苛烈トナリ、存亡ニ瀕セル日本ノ国体護持ト再興隆ヲ悲願トシ、自ラハ若キ生命ヲ捧ゲシガ、回天特別攻撃隊ナリ

昭和十九年八月一日、黒木、仁科少佐ナド青年ノ創案嘆願ガ許可サレ、大楠公ヲ仰ギ菊水ノ旗印ノモトニ参集セル若人千余名、其ノ内体当り突入百二十七柱、訓練殉職十七柱、搭載潜水艦八隻ガ犠牲トナレリ茲ニ回天殉道忠士ノ壮烈ト純情ヲ偲ビ英名ヲ刻シ、芳ヲ千秋ニ伝ヘントス

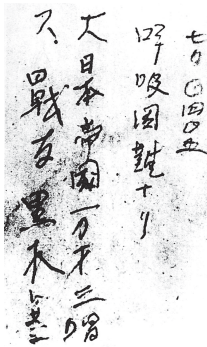
回天発案者黒木博司大尉は、昭和十九年九月七日徳山湾内で樋口孝大尉と訓練中殉職。

碑文

回天の壮拳は世の驚きにしてその忠烈



黒木大尉の遺書



樋口大尉の遺書

二人 人は人の感銘する所なりここに創案者黒木博司少佐を敬慕する人々相計り少佐の筆になる回天の二字を石に刻して郷里下呂に建て之を顕彰すよりて今歌をつらねてその志を傳へその功をたへむとするに詞拙くして意を達する能はざるを恥づ

三 祖国今すでに危しいかにせむ何とすべきか思ひわづらふ身をすてて國にむくいむ一念の凝りて生れぬ魚雷回天

只一人魚雷いだきて波くぐりおごる敵艦粉にくだかむ

百千のいかづち一時に落つること敵艦みちんにくだけ飛び散る

その姿目にこそ見えぬま心とはに守らむ父母の國

昭和三十九年春

平泉澄泣血拜書

黒木少佐の葬儀は戦後の昭和二十一年十一月六日下呂の自宅でお通夜翌七日禪昌寺で告別式が行われた。通夜の席上平泉澄先生は次の一文を捧げた。黒木少佐を弔う

一

秋ふけて 飛驒の山々もみじばに 映ゆるを見れば

想ひいづ 純忠の士 一生涯 頂天立地

報告の 丹きまごころ

二

笑止なり 世の顕官 廟堂の高きに立てど 情報は 余すなければど 見通さず 國の行末 徒らに 月日を送る

三

君思ふ ま心をのみ 唯一の たよりとなして 眺むれば 火を観る如し 盟邦の くらき運命 わが國の 苦しき歩み

四

眠られぬ 夜をば徹して 血もて書く 非常の策 謹みて 上に献じつ 浪くぐる 決死の術 難きをば 自ら擔ふ

五

皇國に幸しありせば いしぶみに 黄金ちりばめ 琅玕の 墓をも立てて いさをしは 村々傳へ 口々に ひろく讀えむ

六

今集ふ 友わづかにて とぶらひは 寂しくあれど 天かけり 見ませみ靈よ 血に泣きて 沈める月の 消えやらぬ 影悲しむを



### 西行と桜 特攻隊員と桜

田中 賢一

西行と特攻隊員とは何の繋がりもないが、桜を眺める心情に共通点が感じられるので、このような題を掲げてみた。

古来、桜を詠った歌人は無数にあるが、西行ほど歌の数において、表現の深刻さにおいて、彼に勝る歌人はいない。西行の桜の歌には命がかかっている。願はくば花の下にて春死なむ

その如月の望月の頃  
という辞世的な歌を残した。それだから命がけだと言うのではない。日本人なら誰でも春爛漫の桜に魅せられる。心を奪われる。それが西行にあっては心が全く体から離れてしまうのである。

吉野山こずえの花を見し日より

心は身にもそはずなりにき

体はこの時何処にあったのか、庵にあって文机に向かっていたのかも知れないが、心は体と別の所、則ち桜の咲いている所に行ってしまうと言うのである。今で言う夢遊病者である。それならば心は何時戻って来るのか。

吉野山花の散りにし木の下に

留めし心はわれを待つらん

心が戻って来ないので、体の方が出かけて行って心を取り戻すというのだから、凄いなものだ。風が吹けば花は散ってゆく。その時心も散るのかというと、

風さそふ花の行方は知らねども

惜しむ心は身にとまりけり

何か身勝手なようにも思えるが、西行という歌人の花に対する思いは只事ではない。

これらの歌に見る西行は、主客に区分すれば、主が花で客が歌人ということになる。ところがもう一つの首題、特攻隊員の歌を眺めると、大部分は主は歌人で客が桜である。桜に託して己が心を詠っている。己の心とは、お国の為近々必ず死ぬということである。

護皇白鷺隊 二飛曹 藤村 勉  
咲く桜風にまかせて散りゆくも  
己れの道で顧みはせじ

第六十九振武隊 少尉 岡安 明  
春四月今を盛りの桜花  
共に散ろうぞ君の御為

菊水四号昭和隊 少尉 佐藤光男  
咲きしより散らん桜花の心なれ  
散るべき時ぞ今ぞこの時

己を主とし桜を客とした歌はまだ沢山ある。桜は皆散りゆく桜である。中には桜を己自身にしているものもある。

第七十四振武隊 伍長 大畠 寛  
さくらさくら若桜今日は散りても

明日は九段の花と咲く

靖國隊 伍長 河島鉄蔵

大君の為何か惜しまん若桜

散って甲斐ある命なりせば

第百十二振武隊 伍長 新井義男

大君に捧げまつらん若桜

散るべき秋に散って香し

これらの歌は、桜を己自身として詠っている。このような態度は特攻隊員の歌以外にはないであろう。西行は桜に心を持って行かれたというが、この特攻隊員は身も心も桜と一体になっ

てしまった。  
もう一つ特攻隊員の遺詠の中に、詠者と桜が全く結び付かない歌がある。  
第六十七振武隊 長沢徳治少尉

来る年も咲きて匂へよ桜花

われなきあとも大和島根に

この部隊は、昭和20年3月29日に明野で編成完結し、知覧から4月28日に沖繩に向かい出撃している。明野を出る頃桜は咲き始めていたであろう。それを見て、来年も再来年も、永遠にこの国に咲いてくれと言っている。我々

はこの人の心を偲び涙を禁じ得ない。  
西行の詠む桜と特攻隊員の詠む桜とが、縁があるやに見えたが、ここにきて全然離れてしまった。

○いざさらば我は御国の山桜

緒方襄中尉は、第一神雷隊桜花隊の桜花搭乗員だった。出撃を間近に控え、

母三和代さんは鹿屋に息子を訪ね一夜語り明かした。去り際に緒方中尉は、

母の鞆にこつそりと次の歌を書いた紙片を入れておいた。

いざさらば我は御国の山桜

母の身元にかへり咲かなむ

三和代さんは帰宅後この歌を見て、

散る花のいさぎよさをばめでつつも

母のこころはかなしかりけり

と詠った。

緒方中尉の遺書

懐しの町 懐しの人

今吾れすべてを捨てて

国家の安危に

赴かんとす

悠久の大義に生きんとし

今吾れここに突撃を開始す

魂魄国に帰り

身は桜花の如く散らんも

悠久に護国の鬼と化さん

(平成九年三月靖國神社頭掲示)

緒方襄中尉は、関西大学を出て海軍飛行予備学生となった。兄徹は京都大

学を出て同じく海軍飛行士官、比島で

既に戦死していた。そこで、

兄も行け我も果てなむ君の辺に

悉く果てむ我が家の風

# 靖國百人一首

田中 賢一

本論に入る前に百人一首について若干解説する。百人一首と言えば、歌留多になつてゐる百人一首を思うが、あれは藤原定家が小倉山荘に在つて襖に書いた歌をもとに作つたもので、小倉百人一首とも呼ばれている。

定家の歌に関する考えは、人の心を詠うことにあり、妖艶さの中に美を見出すという態度であり、道徳とか国家観などということは全く窺えない。

次に現れたのは愛国百人一首である。この歌集は、昭和17年、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社が主催し、全国民が愛唱する古歌を公募し、一流の歌人や歴史学者等の選考委員によつて選定されたものである。飛鳥時代から幕末までの間で詠者が分かつており、愛国の精神が表現されている、というような基準で選定された。

三番目に挙げるのは、平成14年に、国語問題協議会が編集した平成百人一首である。この歌集は、我が国の伝統精神を伝えるものとして、記紀万葉時代から終戦後までの秀歌を、時代順に配列したものである。

嬉しいことに、この歌集には、我が協会が編集発行した特攻隊員遺詠集か

ら一首載つてゐる。それは、第67振武隊隊員で、昭和20年4月28日に出撃した、長沢徳治少尉の遺詠である。

来る年も咲いて匂へよ桜花  
われなきあとも大和島根に

両歌集の中から靖國の英霊に直結するような歌を拾つてみよう。

愛国百人一首より

丈夫の弓振り越し射つる矢を

後見む人は語り継ぐがね

千万の軍なりとも言挙げせず

とりて来ぬべきをのこぞ念ふ

大君の命かしこみ磯に触り

海原わたる父母おきて

今日よりは顧みなくて大君の

しこの御楯と出で立つ吾は

かへらじとかねて思へば梓弓

なき数に入る名をぞとどむる

平成百人一首より

山鳥のほろほろと鳴く声聞けば

父かと思ふ母かと思ふ

あられ降り鹿島の神を祈りつつ

皇御軍に吾は来にしを

敷島の大和心を人間はば

朝日ににほふ山ざくら花

親思う心にまさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん

学徒みな兵となりたり歩み入る

広き校舎に立つ音あらず

本論に入る

○一般の御祭神（特攻と昭和殉難者以外）

（靖國神社発行の『英霊の言乃葉』に拠る）

身はたとえ千尋の海に散り果つも九段の社にさくぞうれしき  
海軍上等水兵 弓野 弦

面たれて涙かくせる吾が妻のこころくみてぞいざたち征かん  
海軍大尉 石川 延雄

かくばかり世界全土にすさまじきいくさの果ては誰が見るべき  
陸軍中尉 折口 春洋

この土のつらなる果てに母ありて明日の壮拳の成るを祈るらん  
海軍中尉 西田 高光

益良雄のゆくとふ道をゆききはめわが若人らつひにかへらず  
元帥海軍大将 山本五十六

矢弾尽き天地染めて散るとも魂かへり魂かへりつつ皇国護らむ  
陸軍大将 牛島 満

国のため重きつとめを果たし得て矢弾つき果て散るぞかなしき  
陸軍大将 栗林 忠道

男子われ防人となる甲斐ぞあれ東半球の果てに死ぬれば  
陸軍中尉 那須 弓雄

大君の国安かれと祈りつつわれは進まむ靖國の宮  
海軍軍属 滝原 清

身はたとへこの沖繩に果つるとも七度生まれ来て敵亡ぼさん  
陸軍上等兵 小渡 壮一

血に染みてちぎれちぎれの軍服を脱がせつつわれなくさめかねつる  
日赤看護看護婦 西沢 渡弥



身はたとへ北水の露と消ゆるとも大和桜の色は変はらじ  
陸軍上等兵 今野留十郎

身はたとへ千尋の海に果つるとも九段の社にさくぞ嬉しき  
海軍水兵長 弓野 弦

吹く毎に散りて行くらむ桜花積りつもりて国は動かじ  
海軍少佐 根尾 久男

山桜ほのかに匂ふこの朝け天つ日影をつつしむ我は  
陸軍兵長 坪川 満

皇国よ悠久に泰かれと願ひつつ桜花と共に靖國に咲く  
海軍少佐 高野 次郎

若桜春をも待たで散りしゆく風の中に枝をはなれて  
陸軍少尉 若尾 達夫

みんなみの雲染む果てに散らんともくにの野花とわれは咲きたし  
海軍上等飛行兵曹 高崎 文雄

大君の任のまにまに丈夫は銃取りもちて出で立つぞ今  
陸軍少尉 篠塚 龍則

垂乳根の母の命よ小休止の路上の夢に出で来給ひし  
陸軍伍長 宮本 宣胤

たのしみは消灯前のひとときを故郷のたより読み耽るとき  
陸軍中尉 溝淵 卓

年寄りて尚続け給う荒仕事吾が母君は尊くもあるか  
陸軍中尉 平野 和美

月見ればしじに偲ぶるはかなる父母いかに兄やいかにと  
陸軍大尉 小山 幸一

仰ぎ見る月ぞ尊し我が父母も故国の空に我を想はむ  
陸軍伍長 五十嵐竹輝

大君の深き恵みにあみし身は言ひ残すべき片言もなし  
陸軍大尉 阿南 惟幾

大君に仕えまつれと我れを生みし我がたらちねの尊かりけり  
陸軍上等兵 沖 源八郎

君の為皇御国の男子我れ何地なりとも屍曝さん  
陸軍軍曹 森下 元美

○特攻戦没の御祭神 (当協会発行の『特攻隊遺詠集』に拠る)  
(航空特攻)

第一神風敷島隊 海軍一等飛行兵曹 谷 暢夫  
身はかるく務め重きを思うとき今は敵艦にただ体当たり

蓄にて散るも又よし桜木の根の絶ゆることなきを思へば  
第一神風山桜隊 海軍一等飛行兵曹 滝沢 光雄

国の為征く身なりとは知りながら故郷にて祈る父母ぞ悲し  
第一神風葉桜隊 海軍一等飛行兵曹 広田 幸宣

母君よ嘆き給ふな父君に家の栄えをゆきて先ず告げむ  
富嶽隊長 陸軍少佐 西尾常三郎

数ならぬ身にはあれども日の本の歴史書くてふその一しづく  
石腸隊 陸軍少尉 井樋 太郎

わが後につづかむ者の数多あればとはにゆるがじ皇御国は  
勤王隊長 陸軍中尉 山本 卓美

母上の御手の霜焼いかならんと見上げる空に春の動ける  
神風第二御楯隊 海軍大尉 村川 弘

兄も行け我も果てなむ君の辺に悉々果てむ我が家の風  
第一神雷桜花隊 海軍中尉 緒方 襄

春まだき九段の花と咲き散りて勝ちみ戦の基ひらかん  
第二十振武隊 陸軍大尉 長谷川 真

誠第三十七隊 陸軍少尉 小林 敏男  
死出の旅と知りても母は笑顔にて送りにてくれぬ我が去る日

第六十七振武隊 陸軍少尉 長沢 徳治  
来る年も咲きて匂へよ桜花われなきあとも大和島根に

菊水三号八幡神忠隊 海軍少尉 大石 政則  
もろもろの装ひつけて国のために立つ姿母に見せばや

第五十一振武隊 陸軍少尉 光山 文博  
たらちねの母のみもとぞしのばるる弥生の空の春霞かな

第五十五振武隊 陸軍少尉 鷺尾 克巳  
告げもせて帰る戎衣の我が肩にもろ手をかけて笑ます母かも

## (空挺特攻)

薫空挺隊長 陸軍中尉 中 重男  
身はたとへ敵の真中に散りぬとも魂はとどめて皇国護らん

次の歌は、挺進第三聯隊がレイテに降下するため、サンフェルナンドの宿舎を出たとき壁に書き残してあった。

花負ひて空うち征かん雲染めん屍悔いなく吾等散るなり  
詠人不知

次の歌は、戦局がいよいよ苛烈になった昭和19年中頃、挺進練習部の構内にあった独身将校宿舎の廊下に張り出されていたもので、それから間もなく動員が下令され、この将校達は比島に行き、殆どが戦死した。

いつ征くかいつ散るのかは知らねども今日のつとめに我は励まん  
詠人不知

挺進第三聯隊中隊長 陸軍大尉 桂 善彦  
あらはさん時は来にけり千早振る神に仕えし太刀のほまれを

義烈空挺隊長 陸軍大尉 奥山 道郎  
大皇の御楯となりて死なむ身の心は常にたのしかりけり

義烈空挺隊 陸軍大尉 渡部 利夫  
かねてより祈りしときに今会ひて心の中ぞうれしかりける

義烈空挺三独飛 陸軍中尉 町田 一郎  
あらはさん秋は来にけり丈夫がとぎしつるぎの清きひかりを

義烈空挺隊 陸軍中尉 宇津木五郎  
いかならん事に会ひてもたゆまぬはわがしきしまのやまとだまし

義烈空挺隊 陸軍少尉 梶原 哲巳  
魁けて梅とわが身の散りゆかば後に続かん桜花かな

義烈空挺隊 陸軍曹長 今村 美好  
奥山に名もなき花と咲きたれど散りてこの世に香りとどめん

義烈空挺隊 陸軍軍曹 関 三郎  
よしや身は千々に散るとも来る春にまた咲き出でん靖國の宮

## (水上特攻)

海上挺進第十七戦隊 陸軍伍長 竹島 豊普  
身はたとえ海の藻屑と化すると心は永久に御国護らん

海上挺進第十六戦隊 陸軍大尉 上野 義現  
八紘を一字となさん大業の先手となりて進む嬉しさ

第九震洋隊長 海軍中尉 中島 健児  
国思う我が真心は梓弓弦を離れし矢の一筋に

## (水中特攻 特潜)

真珠湾攻撃 海軍大尉 岩佐 直治  
桜花散るべき時に散りてこそ大和の花と賞らるるらん

真珠湾攻撃 海軍中尉 古野 繁美  
いざ行かむ網も機雷も乗り越えて撃ちて真珠の玉と砕けむ

シドニー攻撃 海軍大尉 松尾 敬宇  
益良雄の行くとふ道を征きに征き安めまつらん大御心を



(水中特攻 回天)

回天開発者 海軍大尉 黒木 博司  
国を思ひ死ぬに死なぬ益良雄が友々呼びつ死してゆくらん

菊水隊伊47潜 海軍中尉 仁科 関夫  
未遂に海となるべき山水もしばし木の葉の下くぐるなり

金剛隊伊36潜 海軍中尉 都所 静世  
君がため死すべき秋に生まれける己が命をなぞ惜しむべき

金剛隊伊58潜 海軍中尉 石川 誠三  
母上よ消しゴム買うよ二銭給へと貧をしのぎしあの日懐かし

金剛隊伊48潜 海軍少尉 塚本 太郎  
物言はで我も得言はず別れ来し父なつかしく思う蟬の音

多聞隊伊53潜 海軍一飛曹 川尻 勉  
気は澄みて心のどけき今朝の空散りゆく身とはさらに思はず

○昭和殉難者〔英霊の言乃葉〕及び『世紀の遺書』に拠る)

広東にて 陸軍大尉 堀本 武男  
悠久の大義に生くる道にして我は逝くなり物思ひもせず

マニラにて 陸軍中尉 本間 雅晴  
戦友等眠るバタンの山を眺めつつマニラの土となるもまたよし

巣鴨にて 陸軍大尉 都子野順三郎  
己が身のおぼえなきこと聞かるれどいかに答へん言の葉もなし

ラングーンにて 陸軍憲兵中尉 塩田 源二  
遺書を読む父母の心思ふときははるかに居ます方ぞをろがむ

シンガポールにて 陸軍憲兵曹長 辻 豊治  
故郷の八十路に近き両親は今日の音づれ何と聞くらむ

広東にて 陸軍憲兵軍曹 山田 恒義  
征く日よりささげし生命惜しまねど口惜しき科を如何にとやせむ

ラバウルにて 海軍嘱託 佐藤 彦重  
防人にあらねど吾はみ戦に尽せし心誰か知るらむ

スマトラにて 陸軍中尉 田辺 盛武  
名もすてし朽木の桜時を得て又咲き匂ふ春は来れり

広東にて 陸軍兵長 小場 安雄  
ますらをのみち果してぞ重き罪背負ひ逝くなりもの想ひもせず

広州にて 陸軍憲兵大尉 市川 正  
そのかみのもののふの如く我もまた死の宣告を微笑みて受く

広東にて 陸軍中尉 外山 文二  
科なくて逝きし友等に天神の雷怒りて宵なり止まず

広東にて 陸軍大尉 日高 保清  
大君の御楯たらんと励めども果し得ずして獄舎にぞ哭く

広東にて 陸軍少将 平野 儀一  
今宵より仏華のうてなに住居して真如の月をめぐる楽しさ

グロドックにて 陸軍軍医大尉 山根 重由  
後れしが我今ぞ逝くみいくさに散りし勇士のみたましましたいて

セレベスにて 陸軍憲兵曹長 伊東 義光  
いにしえもかかるためしのあるものを何を嘆かんものふにして

セレベスにて 陸軍憲兵大尉 大柴 林  
これやこれ刑場に行く此の道は男一世の花の道かな

バタビヤにて 海軍大尉 村上 博  
ふるさとに我を待つらむ年老いし母の心にやすらひぞあれ

蘭印にて 陸軍憲兵軍曹 鈴木千代喜  
ますらをの常に習ひし道筋と思へば心涼しかりけり

パリックパンにて 海軍大佐 三善 孝  
銃先に明日立つ今日の我が心明鏡の如し莞爾と死なむ

メナドにて 海軍少将 浜中 匡甫  
責めとりて逝く身は清きメナド原そよ吹く風に胸ぞ涼しき

モロタイにて 陸軍大尉 菅原 功  
曇りなき月を眺めて思うかなわが心境はこの月のごと

○御祭神の遺族の歌

〔「特攻隊遺詠集」『和歌に見る日本人の心』等に拠る〕

石腸隊安達貢少尉の母サク  
やむわれを桔梗手折りきて慰めし優しき吾子は永遠にかへらず

一字隊天野三郎少尉の妹和子  
靖國の社に向かいて合掌すレイテの島に散りし兄見ゆ

勤王隊大村秀一伍長の母  
悠久の大義に生きし空の子は生なく死なく母親もなし

護国隊牧野顕吉少尉の姉くみ  
勲章のリボンの色褪せ南溟に果てし弟のいさをはかなむ

第一神雷隊緒方襄中尉の母三和代  
散る花のいさぎよきをばめでつつも母のころはかなしかりけり

要務中殉職した石川一彦中尉の妻ふさ江  
遺品の手帳繰れど特攻の文字なくト号といふ暗号今にして知る

第六十八振武隊山口怡一少尉の妹筒井純子  
色褪せし兄のうつし糸のほほえみに懐かしさこみあげ指にて撫づる

第百五振武隊林義則少尉の許婚者小栗楓  
亡き人の数に入れるか今日よりは戸籍の朱線胸に痛しむ

八幡神忠隊大石政則少尉の母トク  
はるばると来し方願れば天がけし白マフラーの子の笑顔頭つ

第六十六振武隊後藤春光春少尉の弟慶生  
この空よ亡兄も仰いだこの空よ空は変らず何処におわす

第四十九振武隊伊奈剛次郎の父  
かがまりて粉ひく妻の髪白しいのちなげうち子をば語らず

挺進第三聯隊大川准尉の妻真理子  
さらばとて夫の握れるたくましみ手のぬくもり今も残れる

挺進第三聯隊梅野九中尉の妻チヨ子  
亡き夫と春の一日貝掘りし日向の浜辺吾子の旅行く

挺進第三聯隊中野光義中尉の妻知枝  
迎え火をたけばとと様飛行機に乗って来るかと吾子は問うなり

（以下『和歌に見る日本人の心』より、この本には詠者の記載はない。以下すべて妻の歌）

この果てに君ある如く思はれて春の渚にしばしたたずむ  
亡き夫の恋はしくなりて涙出ず花梨の実黄色になりし畑に

カビエングの椰子の葉陰も歩みしか遺品の靴ゆこぼれ落ちる砂  
その骨は拾うすべなしシタン河の砂一握を骨とするてふ

行きずりの人の面影にかよへればせつなきまでに君よみがへる  
咳しわぶきのあまりに似たりしばらくは顧みたすイむ師走の街に

妻となり君に仕えし我の日の短かかりしよ今に思へば  
帰る日までこの家に居よと直ぐ帰る如く言ひて征きし君はも

淡かりし縁の亡夫を憶ふ日にわが引く草のどれも実をもつ  
吾子が名を呼ばはり給ふ御声さへ聞ゆる如し夫あ生れし家

かくばかりみにくき国となりたれば捧し人のただに惜しまる

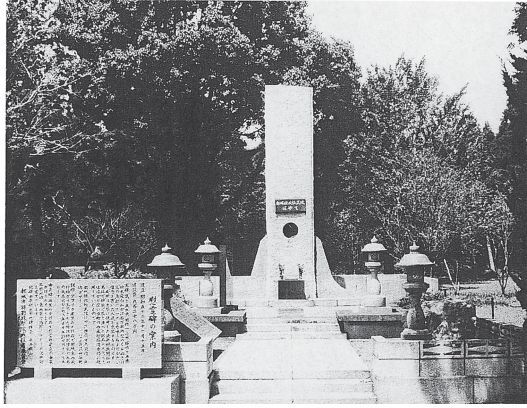


# 都城特攻振武隊はやて慰霊碑

平成20年度  
都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭

評議員 水町 博勝

昭和20年4月、日本の命運を賭けた沖繩特攻戦の先駆けとして、第1特別振武隊第一陣（四式戦・疾風）が、こ都城飛行場から沖繩へ向けて出撃した日である4月6日、都城市都島公園（旧陸軍墓地）の「都城市特別攻撃隊戦没者慰霊碑」前において、表題の慰



所在地 都城市都島町旧陸軍墓地  
建立 昭和52年11月15日  
建立者 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会  
管理 都城市役所内  
都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会  
慰霊祭 毎年4月6日奉賛会主催で実施

霊祭が、同市特別攻撃隊戦没者奉賛会の主催により挙行された。第33回目である。

この日は、曇り空、雨天に備えて設けられた天幕の下に約400名が参列して行われたが、都城市の市長で、同奉賛会会長でもある永峯誠氏は、挨拶の中で「都城市の東（海軍）・西（陸軍）両飛行場から特攻機と直掩機が出撃した日から63年の歳月が経過したが、今や当地は、南九州の拠点として立派に

発展を遂げた。一方、戦後生まれの世代が、戦争の事実を忘れつつある中、市としても、この戦没者の慰霊顕彰を継承し、更なる平和



各団体の供花

と繁栄を祈念する」と力強く述べられた。

戦友を代表して陸士57期の菅原道之氏は振武隊各隊の隊長等多くの同期生を始めとする英霊の芳名に語り掛け、20歳から21歳の若者が覚悟を決めて壮烈な戦いに挑んだその勇魂を讃え、深い哀悼の辞を述べられた。また、参列された多くの同期生達が碑前に進み、「加藤隼戦闘隊」「同期の桜」「海行かば」を献歌された。

当地の桜は、3月26日に開花し、公園内は丁度満開、田圃では早場米の田植えの最中であり、畑は菜の花に彩られ、山には木々の新芽が吹き、霧島連山の懷に抱かれた長閑な当地である。



碑前の祭壇

ふと眼を閉じれば、この4月6日を皮切りに10隊の振武特攻隊が次々に出撃して征ったことが彷彿とさせられ、深い慰霊の想いを込めて頭を垂れた。  
なお、前泊の宿で、夕方NHKのローカルニュースで「宮崎県では明日特攻隊の慰霊祭が行われます。出撃した飛行場に隣接して建てられた碑の前において慰霊祭が11時から行われます」と、場所と時間をアバウトにして放送された。当日は取材もあり、帰路で確認はできなかったが、その様子は報道されたものと思う。地元の慰霊への忘れぬ想いが伝わり、ともに、真実を語り継ぐ記録の大切さも感じられた慰霊祭であった。



第23普通科連隊の演奏

玉砕の島から堂々復員、天皇陛下に拝謁を賜った栄光の聯隊

〔遺稿〕

## 歩兵第五十九聯隊

### パラオ作戦外史抄

聯隊本部付

陸軍大尉 井上 英雄

えても軍の統制を維持して自主管理を続け、翌21年2月、米軍のLSTに乗船して同月17日夕刻、無事横須賀・馬堀海岸に上陸したが、その後も階級章を付けたまま兵舎において規律ある軍隊生活を続け、同月21日に、神奈川県下初御巡幸の昭和天皇に拝謁の栄を賜った唯一の聯隊である。

〔編注〕本稿は『栄光の五九聯隊』なる聯隊史よりの抜粋であるが、著者の井上英雄氏は、広島陸軍幼年学校から陸軍士官学校へ進み、昭和16年7月卒業（55期）後、見習士官として満洲チチハル駐屯の第14師団宇都宮歩兵第五十九聯隊に配属、同年10月陸軍少尉、聯隊旗手、昭和18年3月陸軍中尉、昭和19年3月同聯隊の南方転出に伴い、チチハル出発、本部付（作戦主任）として同年4月パラオ諸島アンガウル島へ進駐、同年8月パラオ本島へ転進、同年12月陸軍大尉、翌20年8月終戦、昭和21年2月に復員したのであるが、同聯隊は、昭和19年9月米軍のペリリュー島上陸後も、同島奪回のための逆上陸作戦計画をしばしば進めようとしたが、同年11月24日ペリリュー守備隊の玉砕後は、パラオ本島の防備を強化し、食料欠乏の悪条件下にあっても旺盛なる士気を保持し、遂に終戦を迎

かにして見たいと思います。

歩兵第五十九聯隊のパラオ作戦と言えば昭和十九年二月、チチハルにおける動員下令に始まるわけですが、今回はその前半を省略して、主としてアンガウル戦闘の始まる直前の状況から話を進めてまいります。

当時私は、聯隊本部付として作戦関係を担当していました関係上、比較的全般の状況を知っておりまして、日誌もつけていましたので、その中から重要と思われる部分を抜き書きしてまとめてみました。

拙文で読みずらい点も多々あるとは思いますが、何等かのお役に立てば、幸甚に思います。

### 一 歩兵五十九聯隊主力のアンガウル島より本島への移動経緯

昭和十九年七月二十五日、コロール地区ならびにペリリュー島へ敵機動部隊による空襲があり、翌二十六日翌々二十七日の両日は、前記地区以外に、アンガウル島に対しても終日にわたり空襲と、浮上潜水艦による艦砲射撃が行われた。

当時三十一軍司令官小畑英良中将ならびに参謀副長を基幹とする若干の幕僚は、パラオ地区視察後サイパンに帰還する予定であったが、敵のサイパン

上陸のためグアム島に留まることを余儀なくされ、しかも、グアム島自体も既に玉砕の寸前に追い込まれていたのである。

前記七月二十六〜七日の空襲前、在グアム三十一軍参謀副長より集団司令部（第十四師団司令部）宛に電信があり「アンガウル島に一ヶ聯隊を置くより、むしろその主力をパラオ本島南地区に移動せしめ、アイライ飛行場の守備に任ずべし」と指示をして来たのである。

集団司令部としては、直ちにアンガウル守備隊長である歩兵第五十九聯隊長江口大佐に対し、一個大隊を残置し主力はパラオ本島南地区に移動するよう、取りあえず打電した。

これに対し、江口八郎大佐は反対の意見を具申した。

理由は二つある。

その一つは、聯隊が軍旗を奉じてアンガウル島に歩を進めて以来、アンガウル島そのものを戦場と心得、配備計画も終わり、全員一致して陣地構築に専念して来たが、その心の中には、軍旗を中心に聯隊全員死なば諸共にとの覚悟があらばこそであり、今更一個大隊のみを残置するのは誠に忍び得ないものがあると言うことである。

またその上には、アンガウル島の守

実践し、社内はもちろん、業界の厚い信頼を保持された。」

### 〈前 言〉

第十四師団のパラオ作戦については、ペリリュー、アンガウル島の激戦を中心に、いろいろの本にまとめられ、既に人口に膾炙されているところでありますが、その間、歩五十九の主力は何をしていたかは、あまり知られておりませんので、この際、その点を明ら



備計画は一個聯隊を基に立ててあり、既に陣地構築の大半を終了している。

しかるにそれを一個大隊に変更した場合、ちょうど大人の着物を子供に着せたようなもので、敵の来襲近きを予測する今日、とても修正が間に合わないのみならず、戦略的に見て、一個大隊を残すくらいなら、むしろ一兵をも置く必要がないのではないかとこの疑問である。

これに対し集団司令部では、海軍の汽艇にて作戦主任參謀中川大佐をアングウル島に派遣し、江口大佐の説得にかけたのである。

江口大佐も命令であるうえ、中川參謀の熱意ある説得には如何ともしがたく、第一大隊をアングウル守備隊とし、主力は直ちにパラオ本島に移動すべく命令を下達したのである。

かくて江口大佐は、アングウル小学校校庭に整列する第一大隊長後藤丑雄少佐以下大隊全員に声涙共に下る訣別の辞を述べた後、七月末より八月中旬にかけて、パラオ本島への移動を完了したのである。

この移動も当時ホーランジア（ニューギニア西部）を基地とするB24の空襲を避けて、主として夜間を利用して行われ、しかも通常の港である西港が波浪高きため使用できず、港と

は名ばかりの東港を利用せざるを得なかつたのである。

## 二 パラオ本島南地区に移動した初期の状況

初めは、瑞穂村（本島西南部）に本部を置き、南地区全般の兵用地誌を調査の後、聯隊本部を南地区のほぼ中央にある、エリギー川の川口近くに置き、主力をその周辺地区に集結し、何時でもアイライ飛行場へ出撃し得る態勢とし、これを支援し得るように、砲兵は東西両翼に各一個中隊を配置したのである。

また、地区隊として指揮下に入った大里大隊は、アイライ・コイグルの両海岸線に配備し、コロール島との接続の要点であるアリミズ水道地区には、第三大隊の広瀬中隊をして、その守備に当たらせたのである。

なお、新たに指揮下に入った海軍部隊も、それぞれその特性に応じて配備し、歩兵第五十九聯隊を中核とする南地区隊の準備は、九月初めに完了した。ただし、アングウル島の場合と異なり、海岸線の守備に任ずる部隊は別として、聯隊主力は陣地構築などすることなく、打撃部隊として専ら出撃訓練に徹底したのである。

## 三 ペリリユー並びにアングウル両島の戦闘開始前後の状況

八月下旬より連日にわたり、B24の来襲あり、敵の作戦近きを思わせたが、九月六日、グラマン戦闘機を主体とする攻撃が始まり、機動部隊の接近が察知され、旬日を待たずして上陸が開始されるものと判断した。

九月十五日、敵はペリリユー島に上陸を開始すると共に、パラオ本島マルキヨク地区へ艦砲射撃を実施、南地区隊としては、敵の上陸を予測し、蜂巣少尉を将校斥候としてマルキヨク方面の道路並びに地形偵察を実施せしめ、何時にても同方面に出撃し得るよう準備を進めたのである。

九月十七日、敵は更にアングウル島に上陸を開始したが、本島に対しても攻撃の手を伸ばすことあらんと判断し、同二十一日、南地区配備の件につき、現地視察と連絡を兼ねて、アリミズ水道地区に広瀬大尉を訪ね、次いで南地区に最も近く所在し、作戦上、連撃を要する歩兵第十五聯隊飯田大隊を訪れ、大隊長と南地区における作戦について、意志の疎通を図った。

当日は同大隊本部に宿泊したが、飯田少佐と、折から来訪した村堀中尉（ペリリユー島逆上陸先遣中隊長）と三人で夕食を共にしている打ち合わせ

をしたが、翌日の夜よりの同大隊の逆上陸作戦については、何等知るところはなかつたのである。

## 四 集団総力を挙げての逆上陸計画

十月初め、集団は総力を挙げてペリリユー島へ逆上陸をする計画を定め、時期は十月に多発する暴風雨の夜として各部隊にその準備の命令を下達し、十月八日、集団司令部において右作戦の細部について打ち合わせを行ったのである。これに基づき歩五九において、十月十日夜曉部隊と逆上陸のための乗船地などの件について打ち合わせを行い、次いで部隊全員に対しては、乏しい食糧の中からなるべく栄養を補給するよう指示を与え、体力の面からも、この作戦の準備を進めていたのである。この逆上陸は、兵数も多く、しかも同時発進の関係もあるので、予定乗船地をマラカル埠頭（コロール島）と定め、海軍部隊進藤大尉の応援を得て、十月十八日頃同埠頭付近の地形偵察を行い、部隊の集結地などについて腹案を決定したのであった。

かくて歩五九としては、集団の逆上陸実施命令を待つのみ態勢となり、十月下旬には戦闘訓練と士気の高揚を目的として中隊検閲を実施し、決戦の日を今や遅しと待機していたのであ

る。また、島嶼作戦の特殊性及び海空軍の支援絶無の状態における作戦のため、特殊編成の斬込隊戦闘要領を作成し、同訓練を連日にわたり実施したのである。しかし、残念ながらこの作戦は、遂に実施されなかった。戦況の推移に伴い、計画の変更を余儀なくされたと思われるのであるが、その作戦変更の証しとして、集団は歩五九に対し現地召集の人員を含めて第四大隊の編成を求めてきたのである。かくて、十一月中旬聯隊は、加藤大尉を大隊長とする第四大隊の編成を完了し、後藤大隊なきあと、二個大隊編成であったものが、再び三個大隊となったのである。

## 五 昭和十九年十二月以降における集団の作戦方針の推移

十一月二十四日ペリリュー守備隊が玉砕した頃より、集団においては、従来の水際撃滅作戦より持久戦的思想に移行したもののように思われる。特に二十年二月には、はっきりとその思想

を打ち出し、パラオ本島の中核部に複郭陣地の構想を示したのである。この間ペリリュー、アンガウルを基地とする、敵海防艦による本島周辺の牽制に対しては、現地召集の沖縄県出身の漁師を中心に、「海のシラミ」と称する

特攻隊を編成して、爆薬を抱えて游泳により適艦に接近してこれを爆破する作戦を展開し、幾多の戦果を上げたのである。しかし、これも敵の警戒が厳重になるに従い、困難の度合いを増して来たので、歩兵砲による夜間攻撃を決定し、三月初めには、歩五九より小宮山中尉を長とする聯隊砲一門をウルクターブル島に送り、昼間は敵に遮蔽し、夜間には付近を航行する敵海防艦を砲撃させたのである。また、ペリリュー島の北に連なるガラゴン島へ歩十五の仁平少尉を長とする斬り込み隊を投入し、立派な戦果を上げたことは、全集団の士気を高揚し、特筆に値するものであった。

ペリリュー島を奪取以来、同島の飛行場を基地として連日の如くF4U戦闘機を主体とする攻撃があったが、当方も適時に対空砲火を交え、多少の戦果を上げると共に、若干の損害を受けたが、戦局に大きな影響を与えるものはなかった。

## 六 食糧事情の悪化から作戦農耕に至る状況

昭和十九年十一月頃より、地区隊における食糧事情は逐次悪化の傾向を辿り、二十年一月頃には体位の低下も目に見えてはつきりして来た。しかるに

集団司令部としては、第一線部隊は訓練に徹底すべきで、農耕などに力を注ぐべからずとの強い方針であった。これは無意味な形式論であり、むしろ体力の保持なくして何の作戦ぞやと言うべきで、この誤りが後に多くの栄養失調死亡者を出し、また、作戦農耕開始の時期を失したのみならず、全般の士気に与えた影響は大きかったと思われるのである。当時、米の補給については、各中隊より強健なる兵を数名乃至十数名運び、糧秣補給所より十km以上にわたる山道を、人力による運搬に頼らざるを得なかった。しかも、その強健と言われる兵においてすら、肋骨が表面に現れ、さながら洗濯板の状況を呈したのである。特に集団全般として問題があったのは、食糧事情が部隊によって大きな較差があったことである。すなわち、第一線部隊において最も欠乏し、後方部隊は十分とは言えないまでも、相当の余裕を持っていたのである。のみならず、米の受領に行く第一線部隊の兵に対し、糧秣補給所の態度は、極めて不遜なものがあり、そのためのトラブルを生じたこともあった。当時の日誌によると、二十年一月十六日には、師団参謀より、糧秣補給所において、歩五九の兵が不穏の態度を取ったので注意するようにとの指示

があった。これに対し、この原因はむしろ集団の施策の誤りであることを指摘し、補給所の一方的報告により判断されぬよう強く進言したのである。このような状況の中で地区隊における各中隊は、時折補給される米では栄養の補給はもちろん、空腹感すら満足することができず、訓練の傍ら、中隊毎に野草収集班を編成し、バナナの地下茎、ビンローの芽、蛇木(羊歯類の一種)などを集めて食用に供していたのである。一月の下旬、聯隊において召集兵の集合教育を行うに際し、砲兵中隊長丸山大尉から「召集兵の教育は必要とは思いますが、それよりむしろ体力向上の方が急務である。体力の向上が直ちに戦力である現在、もし召集兵の集合教育を実施するならば、その間他の兵に対する負担は益々増加し、給与の低下に伴い、人員の自然淘汰の状況になるであろう。」との意見具申があったが、その当時の実情を適切に言い得たものと思われる。かくして食糧に関するトランプルが時折起こるようになり、例えば、某隊における軍馬の屠殺、あるいは作戦糧秣の盗用などがあったが、さすが南地区隊としては大きな問題も起らず、三月頃より一部で自活方法を講ずるの已むなきに至ったのである。右のような状況で推移するうちに、



四月には歩五九のみで約百名に近い栄養失調による死亡者を出し、ここに至っては現地自活を積極的に推進し、農耕による食糧問題の解決を図らざるを得ない状況になったのである。しかし、決心したからといって、直ちに好転する訳には行かない。六月六日の日誌には次のようなデータが残っている。五月中の死亡者八十一名、当日現在の入院患者百六十三名、健康者の体力は、在満当時に比し約五〇%とある。

当時の栄養失調患者の一例を挙げると、健康時、体重六〇kgに近い者が四〇kgを割り、このような状態になると、どのような栄養食を与えても内臓器官が受け付けず、単に素通りするのみで、あとは唯死を待つのみ、誠に哀れと言わざるを得ない有様であった。

六月八日には集団の後方参謀である泉参謀に随行、農耕地を案内したが、兵の食事たるや米とは名のみ主体は甘藷の葉であり、一個中隊における健康者は僅かに十数名を数えるのみで、それとても平時ではとても健康者と言えるものではなかった。当日の日誌に「あ最も精鋭であるべき第一線部隊の兵は瘦せ衰え、死者そのあとをたたず、後方部隊や軍夫は肥ゆ、何の姿ぞやおるべし」と。ここに至り、集団も、その容易ならざる事態に眼を開き、六

月下旬に至って、ついに集団挙げての作戦農耕に踏み切る決心をしたのである。

かくして七月に入り、農耕地を考慮に入れた地区隊の境界変更が行われ、地区隊においても土質環境を勘案して農地の再分配を行い、堆肥の製造なども併せ実施して農耕に徹したのであるが時既に遅く、食糧事情について大なる成果を上げることができないまま終戦を迎えたのである。

## 七 終戦前後の状況

食糧事情の悪化に伴う士気の低下は已むを得ないものがあり、七月には一、二名の游泳による敵海防艦への投降があったが、これは他の部隊のことであり、南地区隊としては、依然、皇国必勝の信念は固く、広島への原子爆弾の投下、ソビエトの参戦などの情報は入手していたが、いささかも動揺することはなく、よもや終戦になるとは夢にも思っていなかったのである。

八月十日過ぎ頃中川参謀より、一部朝鮮人部隊(軍夫)に不穏の動きあるとの情報を知らされ、地区隊としても厳に警戒するよう注意されたが、彼等は鋭敏に終戦への動きを感じ取っていたのではあるまいか。

八月十五日夜中川参謀より電話があ

り、聯隊長共々明朝九時までに司令部に出頭せよとの指示を受けたが、当時

聯隊長は臀部腫瘍のため歩行困難な状況にあり、その旨申し述べたところ、重大問題の発表がある故、万難を排して出席されたしとのことで、已むを得ず聯隊長に当番兵のほか、担架を準備し、夜半に出発、約八時間を要して司令部に到着したのである。その間聯隊長は終始歩行を続け、遂に担架は利用することがなかった。司令部に到着直前、師団通信隊の将校から終戦の事実を囁かれたが、聯隊長には報告することなく、司令部会議に臨んだのである。この会議において、参謀長より終戦のことを聞かされ、次いで全員慟哭の中で、勅命ならば徒に軽挙妄動を戒め、この上は一兵も損することなく故国の地を踏ませることを唯一の任務と心得て、終戦の処理に当たるとの切なる指示を受けて散会したのである。

八月十七日頃、敵はアイライ飛行場に通信筒を投下したが、井上集団指令閣下と表記してあり、直ちに深堀大尉を伝令として司令部に持参させたのである。その内容は現地における終戦交渉に必ずする意志の有無を質して来たので、応諾の意を伝えるため、翌早朝聯隊本部の兵数名を伴い、アイライ飛行場に白布をもって十字を描いたの

である。

集団司令部と米軍との終戦交渉は、敵の艦上で行われたのであるが、この交渉に当たった井上司令官、多田参謀長の交渉内容、態度とも見事なものであり、集団は捕虜という卑屈な待遇を受けなかったのみならず、復員完了までは、パラオ本島には、連絡あるいは交渉の用務を持った者以外は、一兵たりとも米軍を上陸させなかったのである。これは、敗戦というショックにより、ややもすると自信を失い、弱気に陥りがちの全集団の将兵に対し、最後まで日本軍としての誇りを持たせる大きな原動力となったものである。

しかし敗戦はあくまで敗戦である。武装解除に伴い、兵器はもとより将校の軍刀はすべて米軍に引き渡し、本島に蓄積された弾薬類は、日米両軍の協同作業により、あるいは海中投棄を行い、あるいは一地に集積後爆破処理をってしまったのである。

そうした中で、歩五九においては、八月下旬、エリキール川中流川畔の聯隊長宿舎前の台地で、全將兵の見守る中、シベリア出兵、満洲事変、北支の戦闘と輝かしい伝統に映える軍旗を奉焼したのである。しかし、軍旗の一部を細かく切って各自に分配し、今後の心の糧にと、涙の中で誓い合ったのである。

## 八 戦場掃除について

昭和二十年八月以降年末にかけて、着々と復員準備を進めていたが、十二月になって、突然ニミッツ提督より、コロール島地区の戦場掃除を行うよう指示して来たのである。そこで、集団としては、歩十五、歩五十九に各約三百名を基幹とする戦場掃除部隊を編成し、その任に当たるよう命令したのである。

歩五十九においては、この命令に基づき、若い将校を主体に臨時編成の部隊を編制し、同年十二月末、江口聯隊長を先頭にコロール島アミオンス地区に移動を完了し、翌二十一年元旦の未明、全員水浴して禊を行い、心を新たにして新任務に就いたのである。この間、他の将兵は逐次、パラオを去って故国への船路をとったのである。

この戦場掃除についても、米軍との間に協定はすれども命令は受けずの態度で日本軍の自主的方法によって作業に従事した。例えば、アミオンスの露营地には米軍の立入りを禁止し、全く平時の演習のような状況で終始作業を進めたのである。

当初、残留をさせられた兵の中には多少の不満もあったようだが、作業を進めるに従い、軍紀厳正な中にも和気藹々として米軍を感嘆させるような見

事な作業を実施し、戦火のため廢墟と化していたコロール地区を立派に清掃したのである。

二月八日帰還命令が発せられ、翌九日コロール波止場より歩五十九の戦場清掃部隊全員と歩十五の一部が米軍LSTに乗船し、幾多の思い出と戦友の血と涙の滲みたパラオに別れを告げたのである。

## 九 天皇陛下の行幸と歩兵五九聯隊の解散

昭和二十一年二月十七日朝、水平線上に富士山を見る。全員甲板に立ち、誠に感無量なるものがあつた。夕刻無事馬堀海岸に上陸、直ちに兵舎に入つたが、復員局の連中にしてみれば、全員階級章を付けたままであつたので、まず驚いたらしい。すぐにも階級章を取るように指示して来たが、復員手続が終わつて、この兵舎を出るまでは部隊を解散したわけではなく、その日まで、はあくまでも軍隊である、との信念でその指示を拒否したのである。

いままでPWの服を着けた復員部隊の多い中で、大変奇異に感じたものらしい。予てこのような状態も予測していたので、準備していた週番肩章とラッパを持ち出し、平時の軍隊生活のまま起床、点呼、消灯などラッパをもつ

て規制し、週番士官を置いて内務の責任を取らせたのである。しかも夜は軍歌演習を行い、営庭の中を隊伍堂々と行進して士気の高揚を図り、最後の日本陸軍への別れを告げたのである。

当初は、この歩五九將兵の態度に対して内地の状況も知らない生意気者と思つていた復員局の人々もその気持ちがかかると共に、驚異と尊敬の念をもつて見るに至り、上陸後三日目に解散の規定にも拘わらず、陛下の行幸までは是非残られたしとの依頼により、解散を延期して二十一日に天皇陛下をお

迎えすることになったのである。後で聞くとところによると、これが戦後初めての行幸であり、歩五九將兵の前に立たせられ、何くれとなく親しく御下問になったのである。また、陛下の御下問に対する江口聯隊長の烈々たる答申ぶりは見事と言うほか形容のしようのないものであつた。

かくて、翌二十二日朝、解散式を行い、ここに歩兵第五十九聯隊の歴史は完全に幕を閉じたのである。



編注①NPO法人日本パラオ協会では、昨平成19年3月24日から6月17日まで、靖國神社遊就館1階企画展示室において、「戦跡パラオ展―パラオに散つた英霊たち―」(パラオの歴史と

英霊展)という特別展を開催し、多くの参観者達に深い感銘を与えたのであるが、パラオ共和国のトミー・E・レメンゲサウJr.大統領は次のような同展に対する挨拶文を寄せておられる。「この度は、靖國神社及びNPO法人日本パラオ協会他関係の皆様方の御尽力により、「パラオの歴史と英霊展」が靖國神社の境内にて開催される運びとなりましたことは、パラオ共和国として誠に喜ばしいことであり、厚く御礼申し上げます。

一九二〇年、日本はミクロネシア地域の統治を国際連盟により委任され、その行政本部をパラオに置きました。それからの二十五年間、日本はパラオに産業技術と教育制度をもたらし、パラオの文化発展に寄与されました。

一方で、第二次世界大戦以前よりパラオには日本軍が常駐し、このために一九四四年〜一九四五年にパラオも戦場になりました。今もパラオには、多くの日本兵が静かに眠っています。

第二次世界大戦後、パラオは一九九四年十月の独立までの間、アメリカ合衆国による国際連合の信託統治下に置かれました。それまでの日本の産業は失われましたが、今も日本の言葉や文化がパラオ文化の一部として残っています。



このように、光と影の両面があったパラオと日本の関係ですが、両国の長く深い関係は非常に重要なことと考えており、この友好関係が今後も長く続くことを願っております。

この展示会を通じて、日本の多くの人達がパラオのことをお知りになり、是非パラオにお越し下さいませよう、希望いたします。」

②パラオで今も愛唱される歌―昭和十九年九月十五日に米軍がペリリユー島に上陸して以来、二カ月余にわたる日本将兵の死闘に思いを馳せるため、パラオでは日本の国花「桜」に慰霊靈魂の誠を託して「ペ島の桜を讃える歌」を作った。この曲は一番から八番までの構成で、今でも島民に愛唱されている代表作でもある。また、この曲のほかに日本でもよく知られている歌に「酋長の娘」「パラオ恋しや」などがあり、日本とパラオ両国民の心の交流を示している。

「ペ島の桜を讃える歌」

作詞 オキヤマ・トヨミ

ジョージ・シゲオ

作曲 トンミー・ウエンティ

一 激しく弾雨が 降り注ぎ

オレンジ浜を 血で染めた

強兵たちは 皆散って

ペ島は総て 墓となる

二 小さな異国の この島を

死んでも守ると 誓いつつ

山なす敵を 迎え撃ち

弾射ち尽くし 食糧もない

四 日本のは 春いちど

見事に咲いて 明日は散る

ペ島の桜は 散り散りに

玉砕れども武勲は 永久に

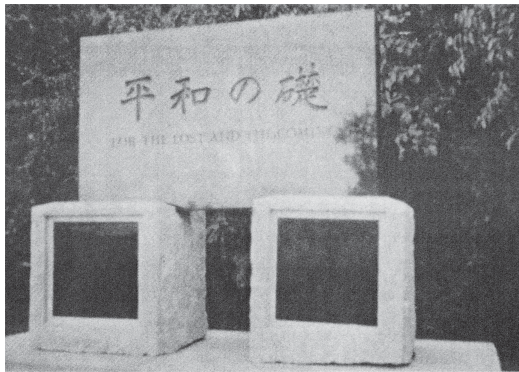
八 戦友遺族の 皆さまに

永遠までも かわりなく

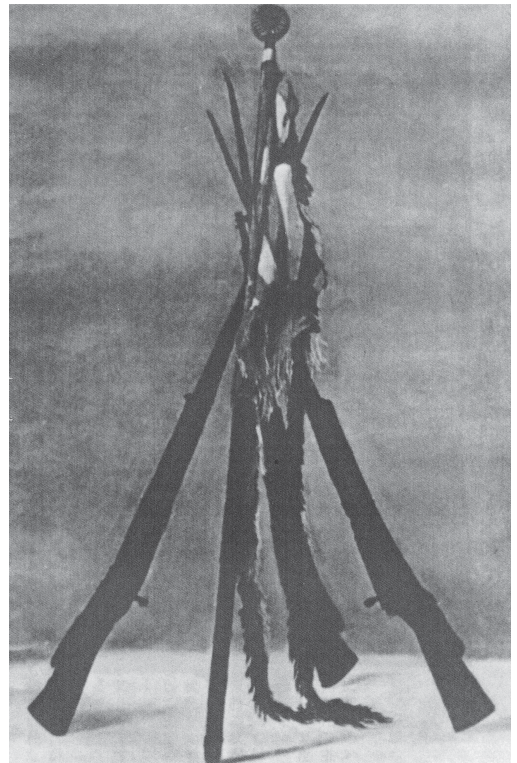
必ず我等は 待ち望む

桜とともに 皆さまを

③米太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥は、自著『太平洋海戦史』の中で、ペリリユー戦について「ペリリユーの複雑極まる防備に打ち勝つには、米国の歴史における他のどんな上陸作戦にも見られなかった最高の戦闘損害比率（約40%）を甘受しなければならなかった。既に制海権、制空権を持っていた米軍が、死傷者合わせて一万人を超え犠牲者を出してこの島を占領したことは、今もって疑問である」と書いており、現在ペリリユー神社境内にある石碑には「諸国から訪れる旅人たちよ、この島を守るために日本軍人が、いかに勇敢な愛国心を持って戦い、そして玉砕したかを伝えられよ」太平洋艦隊司令長官C. W. ニミッツ、と刻まれている。



平和の礎(コロール島)



## 〔遺稿〕 特攻隊員森本秀郎 少年の想い出

神 直道

〔編注〕本稿は神 直道氏(陸軍中佐・士44期)の遺稿である。神氏は、沖繩第32軍の航空参謀であったが、沖繩戦の後半5月中旬、牛島満軍司令官の厳命を受けて、沖繩戦の実状報告と航空攻撃の再興を大本営に直訴する目的で、沖繩本島を逸出し、島伝いに本土まで奇跡的に生還され、その使命を果たされた方である。(参考・神参謀に關しては、伊藤正徳著『帝国陸軍の最後(特攻編)』「十二 我兵は守備にも強し・京僧少佐の感銘深い奉公」と題する記述(200頁〜202頁)中第44旅団の首里城防戦に關して次のように書かれている。「佐官将校達の殉国の奮闘を顧みる場合に、その名を逸することの出来ない一人に、第四四旅の参謀京僧 彬少佐があつた。京僧少佐は歩兵学校の教官として副官森脇弘二中尉を帯同、各戦線を巡回して現地部隊に歩兵戦闘の傳習教育を行つていた将校である。たまたま沖繩に来て傳習を済ませ、さて帰京しようとしたが米軍の来攻に會つて船便を失い、暫く機会を待っている間に、同期生航空参謀神直道中佐の勧誘に応じ、恰も参

謀のなかつた第四四旅団の作戦参謀を手伝うことになつたのだ。

第四四旅は、京僧の参加によつて戦力を倍加し、例えば那覇市の関門、天久高地の戦闘に於て、海兵第六師の攻撃を、僅か三個中隊を以て阻止すること十数日、遂に敵をして攻略を断念せしめ、西方から迫る首里の攻略を防止止めた如きは顕著なる事実として記録されるところである。京僧は彈雨中を壕から壕へと飛び廻つて、正に潰えんとする守備隊を指導激励し、参謀にして然も勇壯無比の大隊長を兼ねる戦績を残したのであつた。

五月中旬、彼れを誘い止めた神参謀が、航空攻撃の再興を本国の首脳に直訴する目的で沖繩を逸出した時も、京僧は帰京の意なく、ただ、歩兵戦闘の実訓を本国の学校に伝えるため、帯同して来た森脇中尉の逸出を要請し、自ら一人踏み止まつて第四四旅と玉碎の運命を共にした。日本の善戦は、このような立派な将校に俟つところ多大であつたことを回顧させるのであつた。)

この記事にある「森本秀郎少年」とは、比島方面陸軍特別攻撃隊・八絃隊(一式戦)の小隊長森本秀郎少尉(陸士57期)のことで、昭和19年11月27日レイテ湾の敵艦船に突入、散華されて

いる。なお、文中の仮名遣いは、現代仮名遣いに改めた。」

### 森本少年の死

二十三、四年も前のことである。

私の一家は渋谷の代々木の原っぱの地に於て住んでいた。南の方は低い平地になつていて、一見高台とも見えるところで、偕行社住宅と言われる軍人村であつた。軍人村の交際は、同職業のよしみから親しいようでもあり、又互いに遠慮がちでもあつたようだ。

私の家と丁度裏合わせの一家は森本家である。粗末な板塀越しにお互い話も出来る程のところにある。

御主人は中佐であつたらうか、航空部隊を連れて大陸方面に出征中であり、物静かな奥さんと小学校四、五年位の色白な可愛い二人のお嬢さんとが平和に暮らしておられたようである。その静かな家庭も日曜日になると俄然賑やかなる。陸軍幼年学校に行つてゐる秀郎少年が帰つて来るのである。妹達は「お兄様」「お兄様」と寄り付いて行くらしい。少年も時に朗らかな大声で、「おーい、やえ子」「おーい、きぬ子」と呼んでいる。仲のいい兄妹達である。

暫くすると、今度は少年の友人達の

賑やかな声が聞こえて来る。同じ幼年学校の生徒で東京に家のない少年達が決まつて訪ねて来るのである。三、四人、多い時は七、八人も。

賑やかな談笑が済むと、今度は静かにレコードに聴き入つてゐるようである。当時の流行歌でもなく、少年の好きそうな勇壮活発な曲でもない。決まつて典雅な、そして端正なクラシックであつたようだ。

夕方になると少年達は「おばさん、今日はごちそうさま」と口々に礼を述べながら、靴音高く急ぎ足で帰校の途に就くのが慣わしみたになつてゐた。

私が子供を抱いて散歩しているのに出会うと、少年達は軍人村の住人といふことを知つてか、軽く目礼し、或いは白い手袋をかざして挙手の礼をして立ち去つて行く。紅顔の、或いは色白の眼の澄んだ少年達であつた。

いくばくもなく、森本家も私も転任転職や支那事變の拡大、或いは太平洋戦争の勃発等の為、別れ別れになり、お互いに音信もないうままであつた。

何年か経つた。

昭和十九年十月末、太平洋戦争は激烈と言ふよりも既に頽勢覆うべくもな



い有様で、フィリピンには、もう米軍大兵団の反攻が始まっていた。

私は東京の或る部隊司令部に勤務していた。内地への空襲が激化しつづあつて忙殺され、毎晩寝泊まりの勤務であつた。

そして、陸海軍航空部隊の組織的な特攻戦法が芽を出しつづあつたときでもあつた。

或る朝、分厚な情報電報に目を通してめいた。その電報には、「うっ！」というレイテ沖の米軍上陸船団に突入した事、その戦果が至大であつた事が報じられていた。

特攻勇士の名前の中に「陸軍少尉森本秀郎」というガリ版刷りの字が私の眼からどうしても離れない。「そうだ、秀郎君も一人前の飛行機乗りの年頃だつたなあ」と。

私は深々と息を吸い込んだ。私も飛行機乗りである。部下を指揮した事もある。教えた事もあつた。

空中戦闘も爆撃も、そして偵察飛行ですらも、空中戦士は常に生還を期せぬ覚悟であつたし、特攻的気力でやらねば事は成就せぬと先輩や教官から教

えられもし、又教えた身でもあつた。然し、「体当たり」という、考えたり口で言つたりする事は可能でも、行う

事の至難な所謂「特攻」は、偶発的な場合や極限の戦況以外には思いも寄らぬ事である。

脳裏にふっと色白な秀郎少年の顔が浮かんだ。少年の母、可愛らしい妹さん達の面影が、チラリと過ぎた。

私に若し「特攻」の任務が与えられたら、自分の手で操縦桿を前に押し、果たして自らを死の軌道に乗せられるものだろうか、そのような反省がおのずと湧いてくるのを揉み消すわけには行かなかつた。

◇ ◇ ◇  
フィリピンの敗北、沖縄の失陥、日本本土の壊滅的な爆撃、そして昭和二十年八月の終戦。

それから数年、焼土と化した東京の世田谷観音寺で、第一回の特攻平和観音の祭典が行われようとしていた。

私も航空の生き残りの一人として、少し早目に出掛けた。五月の陽光で汗ばむ程の気候であつた。まだ参会者のまばらな境内の一隅、古い大木の緑陰に、森本老御夫妻が静かに待つておられる姿が目に入る。

「森本さん」、私は思わず歩み寄つて声を掛けた。

「秀郎さんが・・・」私は何と言つていいやら、戸惑つてみると、奥さんは、「あなたは御無事でようございま

したわね」と、静かにむしろ私を慰めてくれる。

老御夫妻は、観音様を通して可愛い子供に会える事の喜びを待つておられたかのようである。

近況を交換しているうちに式典が始まった。

別れ際に奥さんは、ポツリと静かに言われた。「教育というものは大きな力を持つているものでございますわね」と。

身体之余り頑健でもなさそうな、気の優しい少年、妹を愛し、音楽好きだつたあの秀郎君が特攻作戦の先駆けとして南溟の海に自ら突入していったあの

気力、それが果たして「愛国心」そのものだけで生まれ出たものであろうか、命令によるのか、興奮の故か、嫌々ながらか、否、使命感からであるのか。

◇ ◇ ◇  
森本秀郎君、大正十二年七月、久留米に生まる。軍人であつた父に従つて

任地を転々とし、小学校は渋谷、浜松と変わり、中学校も浜松、成城と転校して昭和十三年四月、東京幼年学校に入

学、昭和十六年四月、陸軍予科士官学校、次いで昭和十七年七月、陸軍航空士官学校に入學、昭和十九年七月、陸軍少尉に任官、第五十七期生と呼ぶ。時に弱冠二十一歳。

温かい父母の膝下にあつたのは、実質的に十三、四年位であつたろうか。

◇ ◇ ◇  
少年の母は、二十数年前を想い出しながらポツポツと語る。

「あの子は本とレコードが大変好きでして、幼年学校から日曜の朝帰宅する度に近所の本屋さん、レコード屋さんに寄つては注文をして来ました。本は吉田松蔭やそういう様な人達のものも多く、レコードは決まつて洋楽のクラシックばかりでした。」

憂国の志士に関する本とクラシック音楽。妙にチグハグな感じがしないわけではないが、何物かに打ち込み、頼ろうとする努力と幻妙な音の世界に没入して清らかな心を持って行こうとする

努力とに何か通じるものがある様で、ぼんやりとながらその心境が分からないでもない。

◇ ◇ ◇  
毎日に待ち兼ねていた様にレコードを掛けていた事が想い出されてならない。ハイドンであつたろうか、モーツァルトであつたろうか。

母は続けて言う。

「秀郎は大勢の友達と仲良く交際しておりました、日曜になると、四、五人も、多い時は十人近くも家に連れて来るのです。そして、私にそつと申します。『お母さん、みんな東京に家が

なくて、よそに行くところがないんだよ。みんなに御馳走してあげてね。その代わり僕はお茶漬けでいいんだよ」と。そんな優しい面を持っている子でございました。家が狭くてお部屋一杯に詰め込んで、足の踏み場もない位でした。娘をおそば屋さんやお菓子屋さんに走らせて、日曜は大変でした。それでも秀郎と同じ年頃の子供達が喜んでくれているのを見ると、張り合いもあつたし、楽しみでもございました」と。心持ち顔を赤らめながら、そして淡々と続けて言う。

「主人が出征して不在でしたが、給料には限りがあるし、私の指輪や帯留が何時の間にか姿を消してしまいました。」それでも悔いのなさそうな口振りであつた。家計に多少の顧慮はあつたにせよ、本やレコードを買い、大勢の友達を連れて来る少年の無邪気さ！母への甘え！

◇ ◇ ◇

私は或る日森本家を訪れた。秀郎君の少年時代からの膨大な日記、文集、文稿、交友の通信文、どれから手に取ってよいか分からぬ位の数である。

私は特攻作戦の先駆けとして、爽やかに飛行して行った、あの気力の出所が知りたかつた。

手近な日記の一冊の頁をめくりながら、森本老御夫妻と語り合つた。

「秀郎が幼年学校に入つて間もなく、家に帰つてこう申すのです。『お母さん、陸軍は世間と反対の教育をするらしいよ。暑い時には日向に出ると言うし、涼しい時には日蔭に入れと言うしね』と。」

陸軍の将校生徒教育の厳しさに面食らつての事であつた様だ。父は過ぎ越しの軍隊生活の厳しい体験を、わざと予備知識として与えずに愛児を学校に入れた様である。

「教育の力は大きいものでございませう」と、かつて世田谷観音の境内で語つた一言を、又ポツリと言う。

「幼年学校時代の石川さんと申す生徒監、士官学校時代の栗原さんと申す区隊長の方、この御二人に大変傾倒いたしましたして、学校を卒業する時には、丁度、幕末の志士という様な言動が多ございました。」

森本少年が私淑していた生徒監、区隊長という人の思想動向や教育鍛錬の方法は、皆自分からなければ、純真素直な少年をそのように育て上げる為には、余程の感化力を持つていた様であり、かつ或いは相当のナシヨナリズム思想や、当時一部に唱導された国家主義思潮に色付けされていた様でも

ある。

◇ ◇ ◇

日記を通読してみると、秀郎少年の考え方は、当時一部の歴史学者や思想家達の唱導してた水戸学乃至神道思想を根本としている。

天皇を絶対唯一神とする惟神之道であり、天皇信仰であつた。当時ヨーロッパ戦場で、次々に崩れ行く都市や国家や民族の悲惨さを凝視しながら、神州不滅を確信した。否、確信というよりも祈りに祈つた。

日記に記している詩歌は、橘曙覧、佐久良東雄、そして平野国臣ばかりであつたし、高杉晋作や西郷隆盛の言行を引例している感想が多かつた。

聖パウロの『神を発見し、神に仕えるために世界歴史が動いている』という言葉を引いて、神を天皇に置き換えて自らの心に言い聞かせようとして一節もある。

休みになると高尾山の不動滝に行つて、荒行、禊ぎを行つて心身を清めようと努めた。

当時のその様な思想傾向の人達が行つた『仲間づくり』『同志づくり』に懸命に努めている様子も見られる。更にある日の一節に次の様にさえ述べ

『子を神経衰弱といへるものあり。亦気狂といへるものあり。然り予、非気狂と称する者より見れば気狂に相違なし。と雖も、予より見た非気狂は亦気狂なり。もつとも「酒は飲むべし、美人は愛すべし」式の忠孝仁義はもうたくさんなり。予は気狂でも、断じて此の気狂が国を護るぞ』と。

先人内村鑑三先生の軒昂たる気力と論法にも似ている。

少年は青年に成長していた。秀郎君の遺稿に『日本女性に与ふる書』という分厚な一冊がある。二十歳の青年かと驚く様な内容のものである。

『予の魂を、命を受け継ぐもの居らざれば成仏出来ず。「一人は必ず残しおくなり」と言はれし松蔭先生の気持なり』と日記に記してある考え方にその源を発し、当時、思想問題、思想運動から疎外され、圏外にあつた日本女性に書き残されたものである、女性自身に、そして子孫を育て上げるべき日本女性に、相携えて日本を護ろうとする懇願と委嘱に満ちている。まさに驚くべき一書である。

青年はかくて思索と苦行の後、愛国の戦士として文字通り後顧の憂いがないものの様であつた。

昭和十九年十月、太平洋戦争の関ヶ



原とも言われたフライピン作戦がミンダナオ島の南方の一島レイテで火を噴いた。一部の陸上兵力しかないこの島には、航空兵力による攻撃救援しか策はなかった。連日の出動で航空軍の兵力は減る一方であった。

十一月二十一日、ネグロス島の戦闘司令所の航空基地の午後、かすかに耳慣れた爆音が近づいて来る。

空戦の損耗で可動機数の少なくなっていた航空基地では、誰もが待ちに待っていた飛行機、然も「隼」が稚拙ながらしつかりした編隊で、心持ち性急な飛び方で場周飛行を始めた。その数十一、増援のため「クラーク」から来たのだろうか、それとも内地からであろうか。

逐次着陸した飛行機は、整備員の誘導で直ちに飛行機掩体へ誘導される。十一名の操縦者は、静かに、そして足早に指揮所に近付いて来た。

「八絃隊、田中中尉以下十一名、只今到着いたしました。」若い指揮官は一同を整理させて、落ち着いた静かな声でそう申告する。

これは特別攻撃隊の一隊であった。靖國とか鉄腸とか愛国、護国を暗示する名前は特別飛行隊だけの榮譽であった。全員二十歳前後の童顔の若者ばかりである。

部隊は明野飛行学校で編成され、十一月十三日出発、南九州、台湾を経て、敵機の眼をくぐり抜け、途中故障機一機を残置して到着したという。

一同、気負い立っている様子も、誇りがまじりさも見えぬ。ましてや、大言壮語もなければ暗さも微塵もなかった。真っ黒に日焼けした顔にチラリと白い歯が見えるだけ。眼光は鷹の眼の様に鋭く光っている。飛行機乗り特有の眼である。

森本少尉は、八絃隊の小隊長として、たくましく成長した身を列の右翼にならべていた。

幼年学校時代に生徒集会所で洋楽レコードを聞かせてくれと上申し、一部の者から軟弱者とののしられながらもついに意志を押し通した紅顔の少年がぎりぎりの戦法を身をもって行おうとしている戦士に成長していたのである。

戦士達は、数日後の決定的な戦闘を控えて、誠に静かであった。これが特別攻撃隊かと思われる程。出撃までには、数日の余裕がある。隊員達は豆々しく整備部隊と連絡したり、空中、海上の敵情を地図に書き込んだり、レイテ島で苦戦する陸上軍の状況を調べたりしていた。何時でも出動できる態勢である。

森本少尉は、隊員の故障機の補充の為、米軍戦闘機の跳梁する中をしばし他の基地と往復したり、隊長と共に直掩戦闘機隊と打ち合わせをしたり、なかなか多忙であった。

彼等には唯一つだけ、未練らしいものがあった。それは一度だけでいいから、敵戦闘機と渡り合ってみたくという願望であった。

明野は戦闘機の総本山であり、彼等は明野の空で空中戦闘の訓練を受けて来た。特攻を厭うのではなく、日頃練磨の腕を、敵戦闘機によって試したいというのは、戦闘機乗りとして、当然の願いであるに違いなかった。

彼等は戦闘飛行集団長青木武三少将の下に集まった。青木少将は戦闘機隊育ての親である。幾多の戦闘機の名操縦者を世に出した元老格の將軍である。若者達は今生の願いを込めて申し出た。「集団長閣下、一度だけ空中戦闘に参加させて下さい。」

青木少将は、その経験から彼等の空中戦闘技術を判断していた。如何に厳しい訓練をしてみても、高度の戦闘技術は未だ身についているとは思われなかった。そして、仮に今ここで敵の戦闘機を五機や十機叩き落としてみたところで、如何に戦局に貢献するであろうかとも思った。それよりも、この部

隊は特別攻撃隊であった。レイテ湾に密集する米国艦船群を撃つて地上軍の作戦に寄与するのが任務であった。

青木少将は、戦闘機乗りの切なる願いをしりぞけ、甘えさせてはならぬと考えた。

「諸子の任務は艦船攻撃である。万一、空戦で事故が起きたら何とするか、任務達成の前に事故を起こすことは、軍人として避けなければならぬ」と、厳然として断を下した。

◇ ◇ ◇

高級副官溝口中佐は、父秀一氏と熟知の人であり、秀郎少尉が赤ん坊の頃、隣り合って住んでいた。ある日昼食を共にした。萬葉隊、富嶽隊、靖國隊等統々と特別攻撃に諸隊が飛び立つ最中である。溝口中佐は、必死の時期を目前にしたこの青年に最早言うべき言葉がなかった様である。「御両親に何か書かんか。」微笑しながら答える。「もう済みました。」そして、静かにマニラ新聞を読んでいる。

溝口中佐は、居たたまれぬ気持ちになりながらも、やっと声が言葉になった。「蚤に食われてなるものか、自重せいよ。」

◇ ◇ ◇

十一月二十六日、八絃隊に出撃の命令下る。

高潮し興奮しやすい心を静かに保つには異状な程の努力が必要であったろう。

彼らは最早死生の悩みから解放されたように快活になっていた。

「でっかい奴がいなかなあ」「いや、俺は絶対に空母だ。」

◇ ◇ ◇

十一月二十七日、薄曇り  
整備隊は薄暗いうちから起き出して八絃隊機と直掩機の整備調整に余念がない。折角ここまで来て、そして土壇場になってエンジンや機体の整備の不調から万一の事があつては、申し訳ない事であつた。

◇ ◇ ◇

飛行場の周辺に分散している飛行機から最後の試運転らしい爆音が高く、指揮所付近は、静かな中にも、かすかなざわめきを感じる。友の、同僚の壮烈な門出への祝福と激励と、次は俺の番だという悲壮感と、そして何とはなしに、俺は後に残されたのだという後味の悪さが混じり合っている。

◇ ◇ ◇

白髪楮顔の飛行師団長寺田中将は、二、三の幕僚を伴い、攻撃隊の出撃を見送りに来ていた。温和な童顔は、数日間の激闘と次々に散っていく空の華への痛恨が、いささかの厳しさを湛えている様だ。自分の子供程の若者達が国の興亡に殉じて行く姿を、目の当たり見る事は到底余人の堪えられるものではない。

◇ ◇ ◇

十時三十分、直掩隊と攻撃隊は師団長の前に整列する。この十数機の小型機が数刻の後、米軍艦船を阿鼻叫喚の恐怖の垣根に叩き込む強烈な爆発力を秘めているとも見えぬ様に、淡々と静かである。悲愴も興奮もない。

◇ ◇ ◇

線に這い寄って来る。

直掩隊に続いて攻撃隊も出撃の申告をする。

「八絃飛行隊、陸軍中尉田中秀志以下十一名、唯今よりレイテ湾敵艦船総攻撃の為出発、誓つてこれを撃沈します。」

◇ ◇ ◇

よどみなく、静かな声は、隊員一同の胸奥を誇張なく言い尽くしていた。寺田中将は隊員達の眼を凝視しながら、頷く。「御成功を祈る。」

◇ ◇ ◇

攻撃隊員達に隊長から今更特別に何も注意したり、訓示すべきものはなかった。平素の団結と訓練、そして愛国の至誠で結ばれた兄弟以上の相互の信頼が隊長の眼の動き、指一本の動き、そして微かな翼の動きが何を指示し何を命じているかは直ぐ分かる程、一心同体的になつていた。

◇ ◇ ◇

空軍に軍刀の必要はなかつたが、武士の魂と言われる一刀をしっかりと握っていた。武運祈願の護符としてか、或いは最後まで、些末の雑念を断ち切ろうとする意味を持たせようとする気持ちからであろうか……

◇ ◇ ◇

轟々たる始動音が広い飛行場の空気を震わし始めた。高く、低く、レバー加減を試みていた隼機は間もなく飛行場周辺の秘匿掩体から一斉に離陸準備を定めて飛び去って行く。

十時四十分、直掩の隼編隊が離陸、攻撃隊には一指も触れさせないぞという気力が充分と見られる様な俊敏な飛行ぶりであった。

◇ ◇ ◇

続いて攻撃隊の離陸、直掩編隊と同じ隼機でありながら、これは又誠に鈍重な離陸ぶりである。猛烈なるエンジン音でありながら、滑走路の端末付近で辛うじて車輪が地面を離れる有様である。翼下には二百五十疋爆弾を二発抱えているのだ。鈍重なのは当たり前であつた。直掩隊と異なるのは、俺達はどうな事があつても直進するんだという気迫に溢れている事であつた。どんな空中妨害があろうと、どんな対空火砲の集中があろうと、退避も回避もあり得ないとする気力充分の飛行ぶりであつた。

◇ ◇ ◇

飛行場の高空で直掩編隊は掩護の任務に就いていた。攻撃隊は場周で空中集合をしている。突如、一機はエンジンの不調からか、事故の合図をしながら不時着態勢に入る。

◇ ◇ ◇

攻撃隊長は低空旋回をしながら不時着機の無事を認めると、「弟よ、後から来いよ」と言いたげに翼を一振りすると、編隊先頭に立ち、静かに高度を上げながら、レイテ湾に向かい羅針盤



攻撃隊は米軍遊撃機の妨害なしに戦場上空に達したという。

時に十一時四十五分、あらゆる口径の対空火炮が集中して、下から熱湯が吹き上がる様である。湾内には米軍艦船群が身動きならぬ程の数で埋まっている。

直掩編隊は既に米軍遊撃機と渡り合っている様で、攻撃隊とは離れてしまった。

別の遊撃機群が八絃隊を捕まえようと高空から追尾突進して来た。然し、その時には八絃隊は固く編隊を組んだ儘、一斉に降下襲撃に移っていた。自らの身体を、自らの操縦する飛行機の

前号の「秋水の試験飛行成らず」を読んで

会報第74号に掲載された「秋水の試験飛行成らず」の記事は、大変興味深く、かつ、感動をもって読ませていただいた。

筆者の河辺勇氏が身近に体験されただけに、関行男大尉以下の第一神風特別攻撃隊敷島隊の五勇士や秋水の試験飛行で殉職された犬塚豊彦大尉に対する追悼の想いは一人なるものがあると思われる。

「秋水」の開発や試験飛行の事に関

死の軌道に乗せて・・・

戦果は、十機十艦とも報ぜられた。戦果確認の任務を持っている直掩隊は全機未帰還であった。

米軍公表は、次の様に述べている。

駆潜艇一 沈没  
戦艦 一 軽巡二 損傷

秀郎君の母は静かに語る。

「あの子が十一月十三日、明野を出発して数日後でした。明野のある料理屋さんから小包が届きました。開けて見ますと、チャイコフスキーの悲愴交響曲のレコードでございました。

しては、幾つかの著書や記録も出されているが、平成16年3月に出版された松岡久光著『日本初のロケット戦闘機「秋水」』（三樹書房刊・四六判上製・本文240頁・カラー8頁）が最も詳しく紹介しているように思われる。

実は、著者の松岡久光氏は、私が学んだ旧制中学・旧制高校の先輩で、昭和19年9月福岡高校理科を繰上げ卒業（21回生）、九州帝大工学部機械科に進まれ、戦後同大学を卒業して、三菱重工長崎造船所に入社、取締役・特別顧問を歴任されて平成5年に退社された

後は、「零戦」や「烈風」など三菱重

出発の前夜とか、レコードを買って来て、蓄音機のある料理屋さんに友達と集まって、一度だけこの曲を聴いたのだと申して参りました。」

父は言う。

「秀郎は、あの戦場で死なずに終戦を迎えたとしても、自らの命を断つていたと思います。それ程、愛国という事に突き詰めた気持ちを持っておった様です。」

君が代の 危機を思えば  
いまここに 礎となり 国を護らん

昭和十九年十一月八日 秀郎

それが秀郎君の遺詠であった。骨肉を削る修業と努力に短かからぬ歳月を費やし、信仰と信念を得た。時には気狂い扱いされた事もあった。

然し、青年はその信仰と信念とで人生の最大、最強の壁に戦いを挑み、そして死んだ。  
国を愛する青年子女の幾多の輩出を請い願ひ、かつ、祈りつつ死んだ。今や幽明相隔でている、

秀郎君は静かに悲愴の曲を聴いているのであろうか。あるいは声高らかに歓喜の歌を仲間達と歌っているのだろうか。 「終わり」

工が設計・製作した飛行機に関する著書も多く出されている。旧制福岡高校の同窓会が毎月開催している昼食会の卓話でも「秋水」の開発に関する話を伺ったことがあるが、同氏が平成16年3月、前記の著書を出版されるに当たって書かれた「秋水」開発の概要、特にロケット燃料開発に絡む話のレジュメを、ご参考までに、以下に紹介させていたたくことにする。

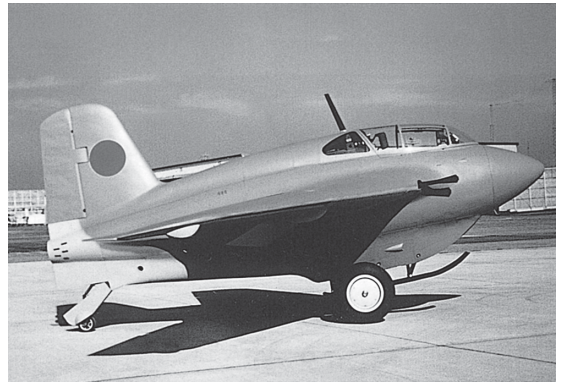
(飯田正能記)

○日本初のロケット戦闘機「秋水」

平成13年秋、三菱重工業株式会社の

名古屋航空宇宙システム製作所の史料室内に復元された「秋水」が一般に公開されるようになった。このずんぐりとした無尾翼、後退翼の特殊な形態を有する機には、戦時下という異常状態にあったとはいえ、先人達の血の滲むような苦勞と執念が秘められていた。太平洋戦争の戦局が次第に緊迫してきていた昭和19年7月末、アメリカ軍の「超空の要塞」B29爆撃機迎撃用として、かつて日本では計画・経験皆無であったロケット戦闘機「秋水」の開発が決定された。

その狙いは、高空から来襲する敵機



復元された「秋水」

に対し、1万メートル以上まで約3分半で昇れるという卓越した上昇力と、900キロ/時という従来のレシプロ機とは掛け離れた高速を活用して対抗しようとするものであった。

この機の計画資料は、同盟国であったドイツから潜水艦により、駐在武官であった海軍の巖谷英一技術中佐が喜望峰の南端を回り、全航程1万5000海里、航海日数87日という苦難の海中潜航の末に、日本に持ち帰られてきた。しかし、その資料も、数年先行していたドイツでさえ未だ試作進行中の段階であったため、技術的には不完全なものでしかなかった。

ロケットには、固体燃料ロケット(火柴使用)と液体燃料ロケットの二種類があるが、「秋水」の見本となったメッサーシュミット163Bロケット戦闘機は、液体燃料ロケットを装備していた。

ドイツでは、イギリスのロンドンを襲ったV1、V2ロケットが有名となっていたが、「秋水」のロケットエンジンには、これとは全く別個のものであった。

「秋水」に用いられた液体ロケットエンジンは、空気中の酸素を利用するターボジェットエンジンと違って、使用薬液自身によって発生するエネルギーによって大きな反動力を得るものであり、例えば、酸素を保有している液体酸素とか、高濃度の過酸化水素とか、硝酸などを使って燃料を燃やすものであり、負荷を容易に調節できるとか、装置全体を比較的小型軽量にまとめられるという特徴を持っている。

「秋水」の薬液は、甲液、乙液の二液を使用していた。甲液は80%濃度の過酸化水素の水溶液で、これに安定剤として少量の8オキシキノリン及びピロ磷酸ソーダなどを混入したものであり、爆発や火災の危険度が極めて高いものであった。乙液は水化ヒドラジン30%、メタノール57%、水13%の溶液

に、銅シアン化カリを1リットルにつき2・6グラム混入したものであり、この中のメタノールが専ら燃料としてエネルギーの発生源となるものであった。

昭和19年7月末、海軍の空技廠で行われた軍民合同会議において、持ち帰られてきた僅かな資料を基にして未知のロケット戦闘機の開発を行うこと可否が論議されたが、この危険な燃料を使用するロケット戦闘機が果たしてうまくいくかどうか議論は沸騰した。

結局、空技廠長の和田操中将の最後の決断によって、開発を推進することが決定された。

その主な分担は、陸軍がエンジン開発を主導、海軍が機体開発を主導し、機体とエンジンの製作は三菱重工業の名古屋航空機製作所と発動機研究所が行うことになった。

これが決まった直前の6月17日の早朝には、中国の成都基地からB29による北九州八幡地区に対する本土初空襲を受けるなど、国内の緊張は日に日に高まりつつあったことも重なって、「秋水」の開発に取り組む関係者の言語に絶する必死の作業が始まった。

この開発は、単に軍部や担当メーカに止まらず、ロケット燃料生産に必要な白金献納運動、燃料格納に必要な

な特殊陶器の製作など、民間の人々までも含めた国家的大規模プロジェクトとして取り組まれていた。

それでも、結果的には、昭和20年7月7日に行われた第1号機の試験飛行は失敗に終わり、その直後に終戦を迎えたことにより、それまでの全ての努力は実を結ばないままに終わってしまった。

しかし、不完全とも思われる資料を基にしながら、僅か1年足らずという短期間に、日本最初の有人ロケット戦闘機を完成させた先輩達の涙ぐましい努力には、今の日本人が改めて学ばなければならない多くの教訓を残していると思う。

そして、この「秋水」の液体燃料ロケットの技術は、現在日本が先進国と並んで打ち上げを行っている国産のH-2Aロケットにも、その血が流れていることを忘れてはならないと思う。

この「秋水」のロケット燃料開発に絡んで、ほぼ同時期に、⑨薬液と称する新しい燃料の開発が九州帝大の工学部応用科学科において密かに行われていた。

この研究は、奥野俊郎教授の指導の下、坂井渡助教(福高の教壇にも立たれていた)などが協力して実施されたもので、福高卒業生の麻生忠二氏



(21回生)、楠本浩一郎氏(22回生)ら  
がその実験に参加していた。この内容  
は、これまで外に出されたことはな  
かったが、麻生氏や西山峰雄氏(22回  
生)の好意により、今回初めて一般に  
発表することになったものである。

この研究の狙いは、大量生産に多く  
の隘路を抱え、かつ、取扱いに危険な  
過酸化水素一辺倒では、将来問題が生  
じる危険が多いと感じられたことか  
ら、酸化剤には97%の濃硝酸(OA液)

## 平成20年度第1回理事会・

### 評議員会報告(平成20年3月

6日開催)

理事長

#### 一 議決・報告事項

本年度の第1回定例理事会及び評議  
員会が、3月6日偕行社において開催  
され、以下の事項が議決されました。

#### 1 平成19年度事業並びに財務報告

別掲のとおりであります。

#### 2 寄付行為の一部改正

事務所移転に伴う住所変更(第2  
条)、及び省庁統合により厚生大臣の  
呼称が厚生労働大臣と変わったことに  
よる(第8〜13条)関連条項の表現を  
改めました。

#### 3 平成20年度収支計算書の一部修正

を使用し、燃料にはメタノールにアン  
モニアと硫化水素を含んだOB液の組  
み合わせとなっていた。  
この薬液を使った燃焼試験は、小型  
と大型の二つの燃焼器で行われ、学部  
の試験室、機械教室の実験室、陸軍の  
太刀洗飛行場などで行われていた。  
この①薬液は、航空機には使用され  
ずに終わったが、終戦間際に、小型魚  
雷に使用するテストが長崎造船所で実  
施されて成功していた。

本件については、次項で、その経緯  
について説明いたします。

続いて会員動向についての報告が行  
われました(別掲)。

年初、会員が、平成15年以来再び  
三千名を切るに至りました。平成18年  
の減員数二二二名に対して、平成19年  
の減員数は三二一名と大幅に増加いた  
しました。この傾向は、今後益々強ま  
るものと予測されます。

これからは、若い世代の入会を図る  
ことが喫緊事となります。総会後の懇  
親会で、今年は今までになく出席者の  
内15%、30余名の一般有志会員が出席  
されたことは、誠に心強いことであり  
ます。会員の皆様方におかれましては、  
尚一層会員増強にご協力を賜りたく、  
お願い申し上げます。

この他にも、九州帝大工学部機械工  
学科の葛西泰二郎教授が、「秋水」の  
超小型、高回転の薬液ポンプの開発に  
協力されて大きな寄与を果たされてい  
る。

今回纏めた著作は、「秋水」の開発  
自体のみならず、その周辺への運用関  
係、生産関係を広く纏めたもので、過  
去の歴史的事実を後輩に遺すことを意  
図したつもりである。

(平成13年2月13日 松岡久光記)

#### 二 本年度予算の一部修正を行う に至った経過報告

##### 1 「特攻勇士之像」の護国神社への 奉納第一期の結果について

大阪芸術大学の教職員・学生有志が  
結成した「日本人の心を伝える会」(以  
下「伝える会」と略称)が発意したC  
D「あ、特攻」の売上利益によって、「特  
攻勇士之像」を製造し、全国の護国神  
社に奉納したい、という伝える会の壮  
心に、協会は全面的に協力することと  
して、CDの製作・販売に当たりまし  
た。

当初、具体的目標は定まっておられ  
ませんでした。たまたま福井県では、  
戦没者慰霊碑建立が計画されていて、  
慰霊団体が、伝える会の動きを知って、  
二人三脚で運動を勧めたい、との申入

◇ ◇ ◇

松岡久光著『日本初のロケット戦闘  
機「秋水」』定価3320円(税・送  
料込み)  
発行所 三樹書房  
〒101-0051  
東京都千代田区神田神保町1-30

電話 03-3295-5398  
FAX 03-3291-4418

れがありました。地元では、像の台座  
を奉納するということが、本運動に弾  
みがつきました。

昨年は、福井県に次いで鹿児島県会  
報72号3〜4頁)と宮城県(会報74号  
49頁)の各護国神社にも奉納されまし  
た。更に世田谷山観音寺(会報73号6  
頁)にも奉納されました。残る1体は、  
今年に入って4月4日に、愛媛県護国  
神社で除幕式が執り行われることに  
なっております。

像の製造は、その効率上、同時に最  
低5体は作る必要がある、ということ  
で、全く五里霧中の状況下で制作に入  
りましたが、初期の「特攻勇士之像」  
奉納運動は、順調な経過を辿って、成  
功裡に終了いたしました。

## 2 今後の奉納運動の進め方

しかしながら、時の経過と共にCDの売上げは鈍化し始め、見通しは明るくありません。このような状態では、靖國神社を通じて各護国神社に奉納運動を強く訴えていくことは、躊躇せざるを得ない状況に陥って参りました。

昭和27年5月5日、東京・音羽(文京区)の護国寺で、特攻平和観音像の開眼法要が営まれ、特攻平和観音奉賛会が結成されて以来56年を経て、今日の当協会があります。

その間、当協会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰に奉仕したいと生き残った旧軍関係者が、自ら集まって特攻隊慰霊顕彰会を結成してから現在の財団法人へと、組織は整備されてきましたが、当協会としては、平成2年3月『特別攻撃隊』史を上梓した以外は、世間に対し、積極的にその存在を訴えることなく協会は運営されて参りました。

また、その『特別攻撃隊』史も、こ



福井縣護國神社奉納  
(平成19年4月13日)



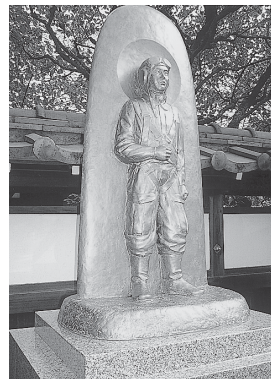
鹿児島縣護國神社奉納  
(平成19年4月12日)



宮城縣護國神社奉納  
(平成19年10月22日)



世田谷山観音寺奉納 (平成19年9月23日)



れまで四版を重ねて、その都度補正をして参りましたが、なお、追加訂正等をすべき部分が多く、これまで編集会議において鋭意検討を重ねて参りました結果、五訂・追補版に準特攻戦没者を加え、それらを集大成した『特別攻撃隊全史』が近く刊行される運びとなりました。特別攻撃隊の史実を後世に伝える資料としては、本書の右に出るものはないと思われれます。しかしながら、重厚で学術的な書籍であるため、広く多く、世の中の人々の目に止まるものではありません。

「特攻勇士之像」の奉納運動に携わってみて、全国の護国神社の境内にその像が建立されるならば、像は巧まずし

て無言のうちに、特攻のことを後世の人々に語り続ける最も有効な働きをして下さるのだ、ということに思い至りました。

平成5年に、特攻隊慰霊顕彰会は、後世に対する継承をより確実にするために、1億円の基本財産で財団法人化され、名称も現在のように改められました。以来、基本財産を拡充することが、財務上、最優先されて、数次にわたり寄付金、繰越金を組み入れることによって、現在、基本財産は、約2億5000万円となっております。

今年、繰越金で、厚労省の指示基準を超えた1500万円を基本財産に組み入れるべく予算を編成しましたが、この分を「特攻勇士之像」の奉納運動に振り向けられないか、厚労省の見解を質しましたところ、そのような目的で、一般業務予算と明確に区別して管理するならば問題はない、とのことで

ありました。

そこで、急遽これからは「特攻勇士之像」の奉納は、当協会が主体となって事業を推進していくことに方針を定め、予算の修正を行った次第であります。

目下、奉納運動の具体的な進め方については、靖國神社の助言を受けて作業を進めております。その詳細は、次号でお知らせできると思われます。

引き続き会員の皆様方の御支援と御協力をいただきたく、心よりお願い申し上げます。



# 平成19年度事業報告

## 一 慰霊事業

### 1 第28回陸海軍特攻隊合同慰霊祭

平成19年3月30日正午から靖國神社で挙行政した。参加者は、来賓35名、遺族40名、会員等198名であった。

慰霊祭終了後、市ヶ谷の私学会館アルカディアにおいて、協会の年次総会を開催し、平成18年度事業及び収支決算に関する報告が行われた。

### 2 第56回特攻平和観音年次法要

平成19年9月23日、世田谷山観音寺において、同寺及び特攻平和観音奉賛会の共催で、年次法要が営まれた。参加者は、来賓38名、遺族36名、会員等238名であった。

### 3 各地慰霊祭への協賛

ア 代表者派遣

慰霊祭名	場 所	参加者
4月4日 予科練雄飛会	靖國神社	小倉評議員
4月6日 都城特攻隊	都城市	菅原理事長
4月7日 第二艦隊	枕崎市	菅原理事長
4月7日 鹿屋特攻隊	鹿屋市	野口評議員
4月22日 万世特攻隊	南さつま市	栗原理事
4月22日 春季例大祭	靖國神社	藤田理事
5月3日 知覧特攻隊	知覧町	杉山理事
5月28日 春季慰霊祭	千鳥ヶ淵墓苑	菅原理事長
6月30日 義烈空挺隊	沖繩・摩文仁	衣笠評議員
7月7日 慰霊協	靖國神社	菅原理事長
10月12日 明野忠魂碑	陸自明野駐屯地	水町評議員
10月18日 秋季例大祭	靖國神社	菅原理事長
10月18日 秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵墓苑	栗原理事
10月25日 神風特攻隊	マバラカット市	深山理事
11月11日 海原会	陸自武器学校	衣笠評議員
11月11日 若潮会	靖國神社	小倉評議員
11月11日 回天会	大津島	菅原理事長
		河崎評議員

## イ 供花料送達

### 慰霊祭名

### 場 所

4月4日 荒鷲之碑慰霊祭	空自熊谷基地
10月7日 原ノ町飛行場戦没者慰霊祭	原ノ町
10月8日 水戸つばさの塔慰霊祭	ひたちなか市
10月15日 串良空出撃者追悼式	鹿屋市串良
特攻勇士之像奉納(除幕式)	参列者
奉納場所	
4月12日 鹿児島県護国神社	菅原理事長
4月13日 福井県護国神社	藤田理事
9月23日 世田谷山観音寺	年次法要実行委員
10月23日 宮城県護国神社	菅原理事長

## 二 その他の事業

1 機関誌「特攻」第70号、第73号を発行、会員その他に配布した。  
 2 CD「あ、特攻」の販売を継続した。前年に比して発売枚数は著減して1000枚に達しなかった。特攻勇士之像(ミニチュア)は、希望者を募って166体販売した。

## 三 会員の動向

入会者122名に対し、退会者は443名で、321名の減少であった。

1 内訳	旧軍	自衛官	一般	計
入会者	34	4	84	122
退会者	372	0	71	443
2 退会理由				
死亡又は本人申告	164			
転居先不明	19			
2年間会費未納	260			
3 会員構成比率				
旧軍	2505	84.3%		
自衛官	32	1.1%		
一般	434	14.6%		
計	2971			

以上

## 収 支 計 算 書

(平成19年1月1日から平成19年12月31日まで)

(第15年度)

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
I 収入の部				
1 年会費	8,000,000	7,819,000	181,000	
2 基本財産運用	5,000,000	4,858,331	141,669	
3 特別会費	4,000,000	3,657,000	343,000	
4 寄付金	1,500,000	1,497,455	2,545	
6 懇親会費	1,200,000	980,000	220,000	
7 出版事業	3,200,000	4,899,740	-1,699,740	ミニ特攻像で売上増加(計画外)
8 雑収入	100,000	79,463	20,537	
当期収入合計(A)	23,000,000	23,790,989	-790,989	
前期繰越収支差額	27,895,000	28,358,118	-463,118	
収入合計(B)	50,895,000	52,149,107	-1,254,107	
II 支出の部				
1 管理費				
人件費	6,640,000	7,112,274	-472,274	
旅費交通費	200,000	212,020	-12,020	
通信費	170,000	194,560	-24,560	
会議費	350,000	253,960	96,040	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	500,000	507,243	-7,243	
リース料	200,000	201,600	-1,600	
租税公課	70,000	70,000	0	
什器備品費	0	15,800	-15800	
礼金	50,000	62,125	-12125	
予備費	-50,000	0		移転先事務所の礼金に充当
2 事業費				
慰霊祭等事業費	8,250,000	8,953,549	-703,549	
史実調査研究費	100,000	0	100,000	
資料収集費	100,000	0	100,000	
出版事業費	760,000	2,214,524	-1,454,524	ミニ特攻像の制作費の増加
広報活動費	4,600,000	4,559,069	40,931	
予備費	-300,000	0	0	慰霊祭等事業費に充当
当期支出合計(C)	22,800,000	25,164,324	-2,364,324	
当期収支差額(A)-(C)	200,000	-1,373,335	1,573,335	
基本財産繰入額	0	0	0	
支出合計(D)	22,800,000	25,164,324	-2,364,324	
次期繰越収支差額(B)-(C)	28,095,000	26,984,783	1,110,217	

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成19年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成20年2月5日

監 事 伊 集 院 雅 英 ㊟

監 事 志 賀 昭 夫 ㊟





御芳志誠に有り難うございました。

◆ ◆ ◆  
新入会員名簿(敬称略)

(平成20年1月1日～3月31日)

宮城県 石川 勝章  
埼玉県 小寺 忠雄  
埼玉県 滝本 俊明  
東京都 上田次兵衛  
東京都 笹 幸恵  
東京都 藤黒 陸夫  
神奈川県 河内 良晃  
大阪府 蔵榊利恵子  
和歌山県 松下 俊喜  
福岡県 伊藤 隆啓  
宮崎県 坂下 邦弘  
宮崎県 小野 昭

東京都 小倉 健男  
東京都 野澤 節郎  
東京都 山口 芳一  
東京都 武藤 健司  
東京都 江口 正修  
東京都 牧野 克己

◆ ◆ ◆  
会員訂報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

茨城県 大間 順三(19・11・13)

埼玉県 関口 秀明(19・11)

埼玉県 塩野 秀郎(19・4)

埼玉県 本間 四郎(20・2・16)

千葉県 山内 一正(19・9・13)

千葉県 米良 成美(20・1・29)

東京都 柴田 武之(20・1・7)

東京都 鈴木 晴順(19・9・8)

東京都 藤田平三郎(20・3・10)

東京都 布施谷 力(20・1・13)

神奈川県 川村 成(19・12・5)

神奈川県 白土 四男(19・11・7)

兵庫県 高島 巖(19・11)

岡山県 小野 慎吾(18・11・30)

福岡県 茨木 和典(19・12・5)

会報「特攻」第73号及び  
第74号正誤表等

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

第73号

10頁 2段目14～15行目

誤 「平成五年」

正 「平成四年」

第74号

10頁 4段目15行目

誤 「菊水四号作戦」

正 「菊水三号作戦」

12頁 3段目20行目

誤 「加良須基地」

正 「香良須基地」

44頁 2段目写真説明文

誤 「日本人戦犯刑死者墓地

(モンテンルパ)」

正 「日本人戦犯刑死者墓地

(モンテンルパ)」

52頁 3段目7行目

誤 「二 大穂 利武

一 土田 八也」

正 「二 池田 守

一 高橋こすみ」

◆ ◆ ◆  
なお、筆者から次のとおり補正の申し出がありました。

第74号

15頁 4段目23～25行目

補正前「意向に反し杉山陸相の求めで内地から3個師団派遣の重

大決定を行う。」

補正後「上海でも騒動が勃発し、

止むなく内地から3個師団を派遣することになった。」

「投稿についてのお願い」

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません。必要の場合は、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

記

〒105-0014 東京都港区芝

2-5-19 TAビル4階

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協

会事務局

電話 03-5730-1016

FAX 03-5730-1017